高岡市埋蔵文化財調査概報第22冊

市内遺跡調査概報Ⅲ

— 平成３年度，柴野遺跡の調査他 —

1993年３月

高岡市教育委員会

高岡市埋蔵文化財調査概報第22冊

市内遺跡調査概報Ⅲ

— 平成3年度，柴野遺跡の調査他 —

1993年3月

高岡市教育委員会

序

本書は，高岡市内の３つの遺跡，柴野遺跡，石塚遺跡，山園町遺跡の調査の成果を収録したものです。

柴野遺跡は高岡市の北西方，小矢部川左岸の福岡町との境付近に位置します。このあたりは古墳が多数あるとともに古代北陸道の川合駅比定地にもほど近いところで，これらとの関連が推定される集落遺跡です。

石塚遺跡は，高岡市街地の南西郊外に位置し，大規模な集落遺跡の南端部を調査し，弥生時代中期の方形周溝墓を検出しました。

山園町遺跡は，高岡市の北側に聳える二上山の南麓に位置し，工事中発見された「なぞの穴」の調査を実施し，これが中世の地下式壙であるとの結論に達しました。

いずれも小規模な調査ではありましたが，多くの成果を上げることができたと思っております。

終わり，調査に当たり，御協力頂きました養藤了文氏，養藤桂子氏，森田勇助氏，安川憲二氏，松本豊氏，筏井与史男氏，炭谷一郎氏，屋鋪直彦氏をはじめ，地元の皆様，関係各位に厚くお礼申しあげます。

平成５年３月31日

高岡市教育委員会

教育長　篠　島　　満

例　言

1．本書は，高岡市内における遺跡発掘調査及び試掘調査の概要報告書である。

2．当調査は，高岡市教育委員会が実施した。

3．調査地区は，以下の３箇所である。

〔１〕柴野遺跡，石堤保育園地区（高岡市柴野1276）

発掘調査　県費補助事業　平成３年６月２日～６月24日

〔２〕石塚遺跡，森田地区（高岡市石塚15）

試掘調査　県費補助事業　平成４年５月21日～６月９日

〔３〕山関町遺跡，院内社参道地区（高岡市院内554）

発掘調査　市単独事業　平成４年12月１日～12月11日

4．報告書作成は，平成４年度の市単独事業として実施した。

5．調査関係者は，次のとおりである。

社会教育課長　佐野嘉朗（平成３年度）

社会教育課長　野村一郎（平成４年度）

社会教育課文化係長　大石茂

社会教育課文化係主任　山口辰一

社会教育課文化係事務員　榎木和代（平成４年度）

6．本書における遺構記号は，次のとおりである。

ＳＡ―柵址，ＳＤ―溝，ＳＫ―土坑，ＳＺ―墳墓，

ＳＸ―その他の遺構

7．本書の作成において，以下の各氏より御教示を得た。

〔順不同，敬称略〕

伊藤隆三（小矢部市教育委員会）

上野章（富山県埋蔵文化財センター）

酒井重洋（富山県埋蔵文化財センター）

塚田一成（小矢部市教育委員会）

宮田進一（富山県文化振興財団）

8．本書の執筆は，山口が担当した。

目　　次

序
例言
目次

1．柴野遺跡，石堤保育園地区 …… 1
Ⅰ　序　説 …… 3
Ⅱ　遺　構 …… 7
Ⅲ　遺　物 …… 8
Ⅳ　結　語 …… 10

2．石塚遺跡，森田地区 …… 11
Ⅰ　序　説 …… 13
Ⅱ　遺　構 …… 17
Ⅲ　遺　物 …… 21
Ⅳ　結　語 …… 22

3．山園町遺跡，院内社参道地区 …… 23
Ⅰ　序　説 …… 25
Ⅱ　遺　構 …… 28
Ⅲ　遺　物 …… 30
Ⅳ　結　語 …… 31

図　面　目　次

図面1	遺物実測図	柴野遺跡，石堤保育園地区	弥生土器・古式土師器
図面2	遺物実測図	柴野遺跡，石堤保育園地区	弥生土器・古式土師器
図面3	遺物実測図	柴野遺跡，石堤保育園地区	弥生土器・古式土師器
図面4	遺物実測図	柴野遺跡，石堤保育園地区	弥生土器・古式土師器
図面5	遺物実測図	柴野遺跡，石堤保育園地区	奈良～平安時代の土師器
図面6	遺物実測図	柴野遺跡，石堤保育園地区	奈良～平安時代の須恵器
図面7	遺物実測図	石塚遺跡，森田地区	弥生土器
図面8	遺物実測図	石塚遺跡，森田地区	弥生土器

図　版　目　次

図版1	遺構	柴野遺跡，石堤保育園地区	1．調査地区全景（東）
			2．調査地区全景（西）
図版2	遺構	柴野遺跡，石堤保育園地区	1．柱穴群全景（西）
			2．柱穴群全景（南）
図版3	遺構	石塚遺跡，森田地区	1．確認状態全景（南東）
			2．確認状態全景（南西）
図版4	遺構	石塚遺跡，森田地区	1．掘り上げ状態全景（南東）
			2．掘り上げ状態全景（南西）
図版5	遺構	石塚遺跡，森田地区	1．弥生土器出土状態（北西）
			2．弥生土器出土状態（南西）
図版6	遺構	山園町遺跡，院内社参道地区	1．調査地区全景（西）
			2．調査地区全景（南東）
図版7	遺構	山園町遺跡，院内社参道地区	1．入口部全景（北）
			2．西側羨門部近景（東）
図版8	遺構	山園町遺跡，院内社参道地区	1．東側羨門部近景（西）
			2．東側羨門部近景（東）
図版9	遺構	山園町遺跡，院内社参道地区	1．東側玄室部近景（西）
			2．東側玄室部近景（西）
図版10	遺物	柴野遺跡，石堤保育園地区	土器類
図版11	遺物	柴野遺跡，石堤保育園地区	土器類
図版12	遺物	石塚遺跡，森田地区	弥生土器
図版13	遺物	石塚遺跡，森田地区	弥生土器
図版14	遺物	山園町遺跡，院内社参道地区	中世土器類

1．柴野遺跡，石堤保育園地区

目　　次

Ⅰ　序　　説……3

Ⅱ　遺　　構……7
1．柵止……7
2．溝……7
3．その他の遺構……7

Ⅲ　遺　　物……8
1．土器類……8
2．その他の遺物……9

Ⅳ　結　　語……10

挿　図　目　次

第1図　柴野遺跡位置図（1/5万）……3
第2図　柴野遺跡付近遺跡地図（1/1万5千）……4
第3図　柴野遺跡，石堤保育園地区位置図（1/5,000）……5
第4図　柴野遺跡，石堤保育園地区遺構図（1/200）……6
第5図　柴野遺跡，石堤保育園地区土製品・石製品実測図（1/2）……9

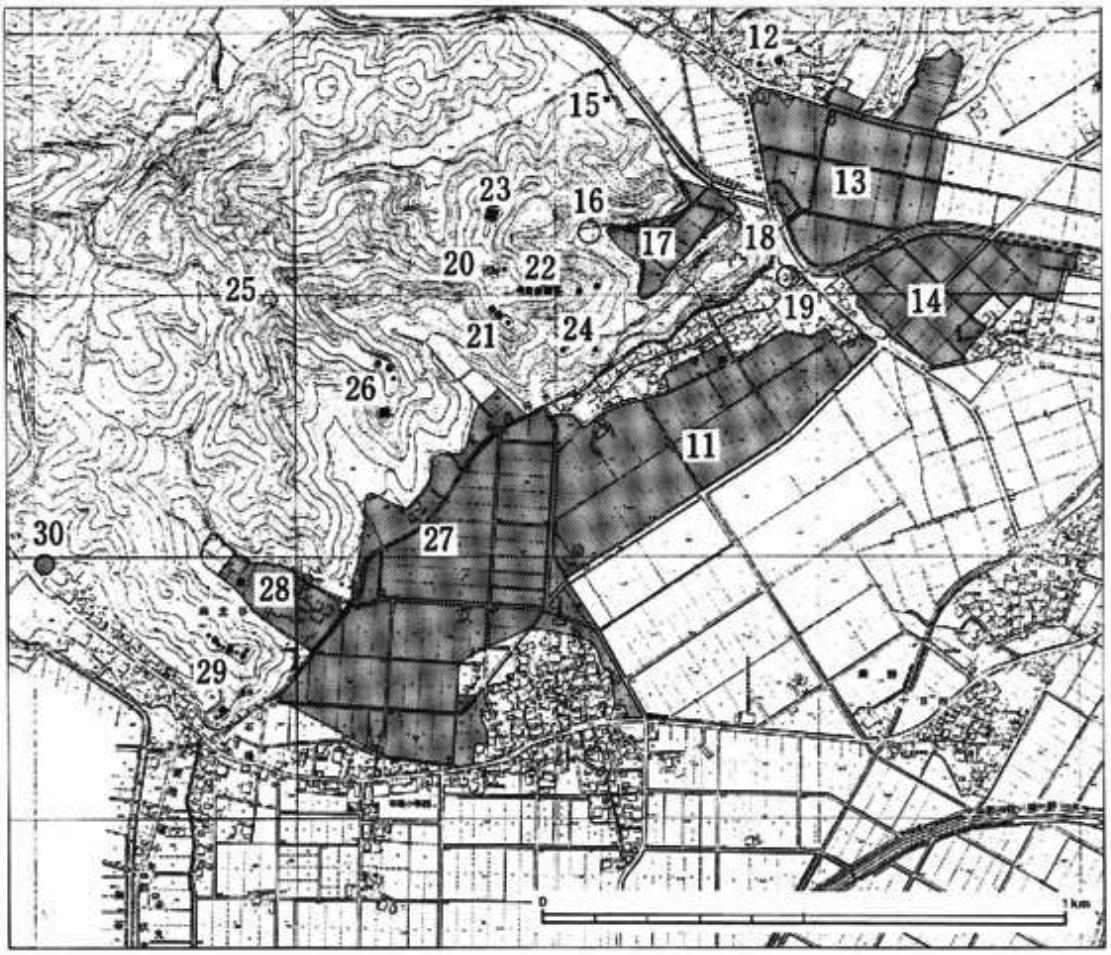
Ⅰ 序　説

遺跡概観

当「柴野遺跡」は，高岡市街地の西側約6.0kmに位置する。高岡市の北西部には「西山丘陵」と通称されている丘陵が走っている。この山麓沿いは，古代～中世の多数の遺跡地帯でもある。柴野遺跡もこれらの遺跡の一つであり，いわゆる「西山地区」の南部，旧石堤村の一角に所在している。遺跡の拡がりは，柴野集落の南側一帯から，南西側の麻生谷集落に達する所までであり，以前，アサバタケＡ遺跡，アサバタケＢ遺跡とされていたものをも含むものとなっている。

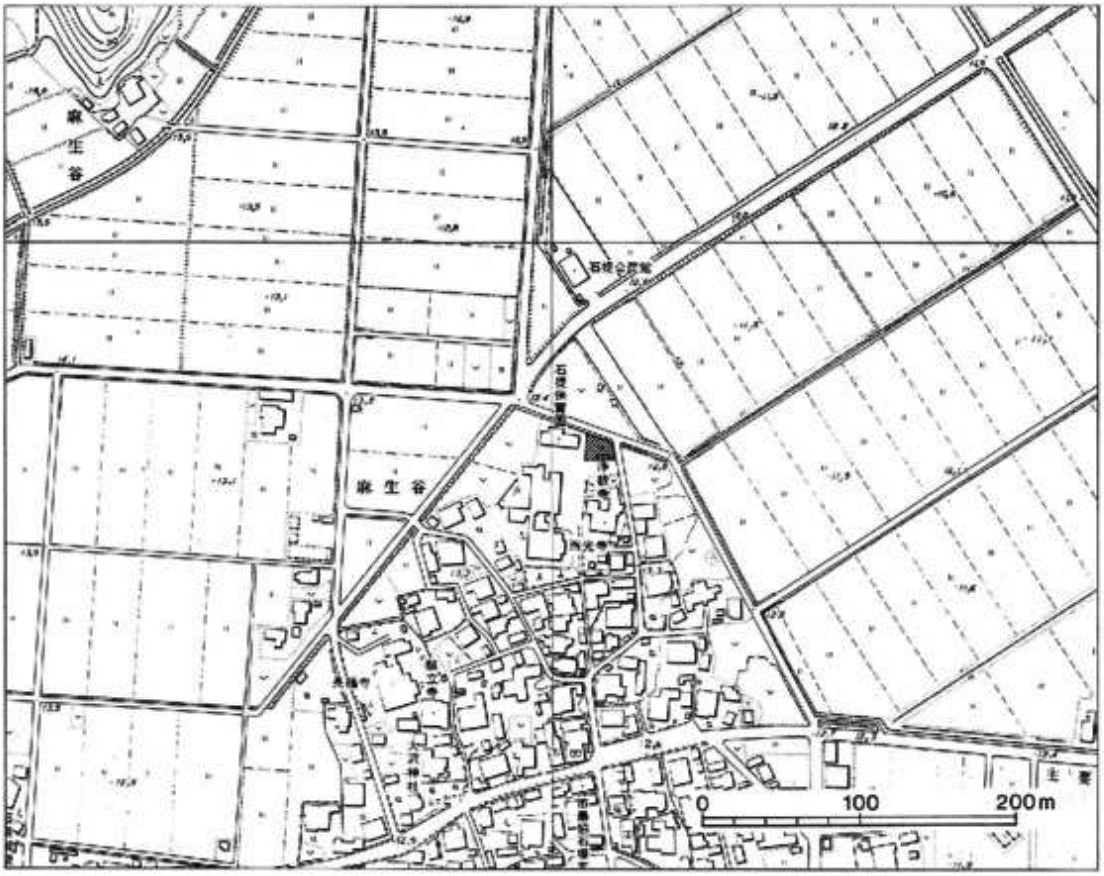
第１図　柴野遺跡位置図（1/5万）

遺跡の範囲は，南北550ｍ×東西600ｍを計る。当遺跡は弥生時代後期以来の遺跡で，古代・中世に及ぶ。南西側は同時期の遺跡である麻生谷遺跡に繋がっている。一方北東側は八口遺跡にほぼ接し，さらに広谷川を隔てて笹八口遺跡が位置している。北西側の丘陵上には，柴野口割Ⅰ～Ⅳ古墳群，麻生谷殿谷内古墳群，石堤柏堂古墳群などが所在し，時代が下がっては，柴野城ケ平城跡などの，中世の山城や砦状遺構が確認されている。中世の信仰を探るものとしての石造文化財も豊富である。柴野集落の一角には地蔵堂塚がかってあったとされ，ここの石仏・石塔が現在木造の小祠に納められている。守善寺には，天文21年の銘のある観音石仏が所在する。



第２図　柴野遺跡付近遺跡地図（1/1万5千）

11．柴野遺跡，12．釈迦道古墳群，13．笹八口遺跡，14．八口遺跡，15．柴野春日古墳，
16．柴野の観音石仏，17．守善寺遺跡，18．柴野高ノ宮城跡，19．前田の地蔵堂塚，
20．柴野城ケ平城跡，21．柴野口割Ⅰ古墳群，22．柴野口割Ⅱ古墳群，23．柴野口割Ⅲ古墳群，
24．柴野口割Ⅳ古墳群，25．麻生谷殿谷内城跡，26．麻生谷殿谷内古墳群，27．麻生谷遺跡，
28．麻生谷新生園遺跡，29．石堤柏堂古墳群，30．石堤長光寺遺跡

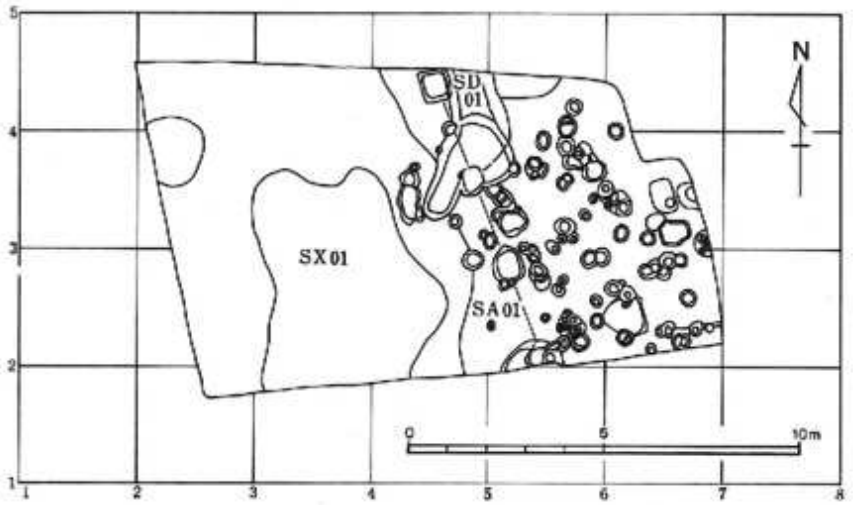


第３図　柴野遺跡，石堤保育園地区位置図（1/5,000）

調査に至る経緯

平成２年７月末，市農業委員会からの照会で，当該地における農地転用と駐車場造成の計画を知った。地主の西光寺（養藤了文氏）の承諾を得て，８月20～22日の３日間，試掘調査を実施した。その結果，溝や柱穴等が検出されると共に，弥生時代～平安時代の遺物が出土した。石堤保育園の駐車場造成と言うことであったので，この試掘調査のみで止めることにした。その後，石堤保育園（養藤桂子園長）から，車庫兼物置（倉庫）の建設に計画が変更になったとの申し出があり，本調査を実施することにした。県埋蔵文化財センターとの協議で県費補助事業とすることになり，石堤保育園にも一部の経費の協力をお願いした。本調査は，平成３年６月２日から同月24日まで実施した。６月２日にバックフォーで表土の除去を行い，その後６月17～24日に，掘り下げや記録の作成を行った。この間，地元の石堤小学校の児童の現地見学会を行った。実働調査日数は７日間である。調査面積は105㎡である。

なお，当地区の西側は，石堤保育園の園舎であるが，昭和55年に，現在の園舎に建て替えられる時，高岡市教育委員会による発掘調査が実施されている。この昭和55年の調査は，「アサバタ



第4図　柴野遺跡，石堤保育園地区遺構図（1/200）

ケA遺跡」として，試掘調査に続いて300㎡の本調査を実施したものである。検出遺構は，掘立柱建物址4棟，溝2条等で，時代は平安時代のものである。

検出遺構

検出遺構は以下のとおりである。

掘址1条（SA01）

溝1条（SD01）

その他の遺構として，凹地（SX01）と柱穴群

出土遺物

遺物は，主に2時期に区分される。弥生時代後期～古墳時代前期と奈良時代～平安時代中期のものである。遺物の種類は以下のとおりである。

1．土器類；弥生土器，土師器，須恵器

2．土製品；土錘

3．石製品；砥石

Ⅱ 遺　構

1．柵　址

ＳＡ01

調査地区の中央東寄りで検出された南北に延びる柵址。規模は３間（7.5ｍ）以上である。方位は22度西へ偏っている。柱間寸法は2.5ｍ等間を計る。掘り方はほぼ方形で，一辺70～80㎝，深さ31～42㎝を計る。北側２番の掘り方は，ＳＤ01に切られている。

出土遺物は，土師器・須恵器である。

2．溝

ＳＤ01

調査地区の中央北部で検出された南北に走る溝。溝としたが土坑状で屈曲している。規模は，幅80～150㎝，深さ14～38㎝で，長さ４ｍに亘り検出された。ＳＡ01の北側２番の掘り方を切っている。

出土遺物は，土師器・須恵器である。

3．その他の遺構

凹地ＳＸ01

調査地区の西側で検出された。大規模な溝の一部である可能性もあるが，土層の状態等も考慮した上で，自然地形の凹地（谷）と判断した。柱穴群のある東側地区との比高差は約40㎝であり，南側へ向かって深くなっている。

出土遺物は，弥生土器・古式土師器である。

柱穴群

調査地区の東側地区は，谷地形の西側地区と比べて，やや高くなっている所である。ここから，多くの掘り方・柱穴（ピット）が検出された。規則的配列を示し，建物として扱ったのは，既述のＳＡ01のみであるが，建物としてまとまる可能性のある柱穴群である。

出土遺物は，土師器・須恵器である。

Ⅲ 遺　物

1．土器類

弥生土器・古式土師器

凹地ＳＸ01から出土した弥生時代後期～古墳時代前期の土器である。図面１～４で45点示した。

高杯　101～102。杯部の破片であり，全体の形態が不明である。

鉢　103。小型の鉢。

甑　104～105。単孔の甑の底部片である。

壺　106～119。大型・中型の壺である106～115と小型の壺である116～119に区分される。ただし，118は中型の壺の底部の可能性もある。

大型・中型の壺は口縁部の形態により，①直口のもの（106～108，114も直口と推定される），②複合口縁となり，外面に稜が付くもの（109～112），③口縁端部が垂下するもの（113）に区分される。小型の壺116は，後の定型化した小型丸底壺に直接繋がる形態となっている。これに対して117はやや大きく別のタイプのものと推定される。

器台　120～123。小型器台の120～121と大型器台の脚末端部の122～123である。

甕　124～145。口縁部の形態が判明する124～137と底部片の138～145である。

口縁部の形態が判明するものは，以下のように区分される。

①く字状口縁のもの。124～129。

②複合口縁のもの。130～134。これらは法量より，大型甕の130，中型甕の131～132，小型甕の133～134に区分される。

③受口状口縁気味になるもの。135～136。136は口縁部外面に櫛描列点文が付く。

④口縁端部が上下へ肥厚するもの。137。

底部片では，平底の138～143と丸底の144～145である。

土師器

掘立や柱穴群から出土した奈良～平安時代の土師器で，図面５に24点示した。

椀　146～163。高台の付かない椀の146～147，149～160と高台付椀の161～163である。底部は糸切りである。内面が黒色化されているのは，160.162.163である。

甕　164～169。口縁端部の形態・手法の違いにより，２つに区分される。①口縁端部をつまみ上げるもの，164～167。口縁端部を巻き込むもの，168～169。法量的には，口径20～24cmぐらいの大型甕である164.165.168.169と口径16～18cmぐらいの中型甕の166.167である。

須恵器

掘立や柱穴群から出土した奈良～平安時代の須恵器で，図面６に20点示した。

杯　無高台の杯の171～173，高台付杯の174～182，及び口縁部片の170である。底部はヘラ切りである。

杯蓋　183～187である。口縁部はいずれも下方へ短く折れる。つまみ部が残存しているのは，183のみであるが，復元して図示した186～187はもとより，184～185もつまみが付くものと推定される。

瓶　188～189。188は長頸瓶の胴部と推定される。189は横瓶の一部と推定される。

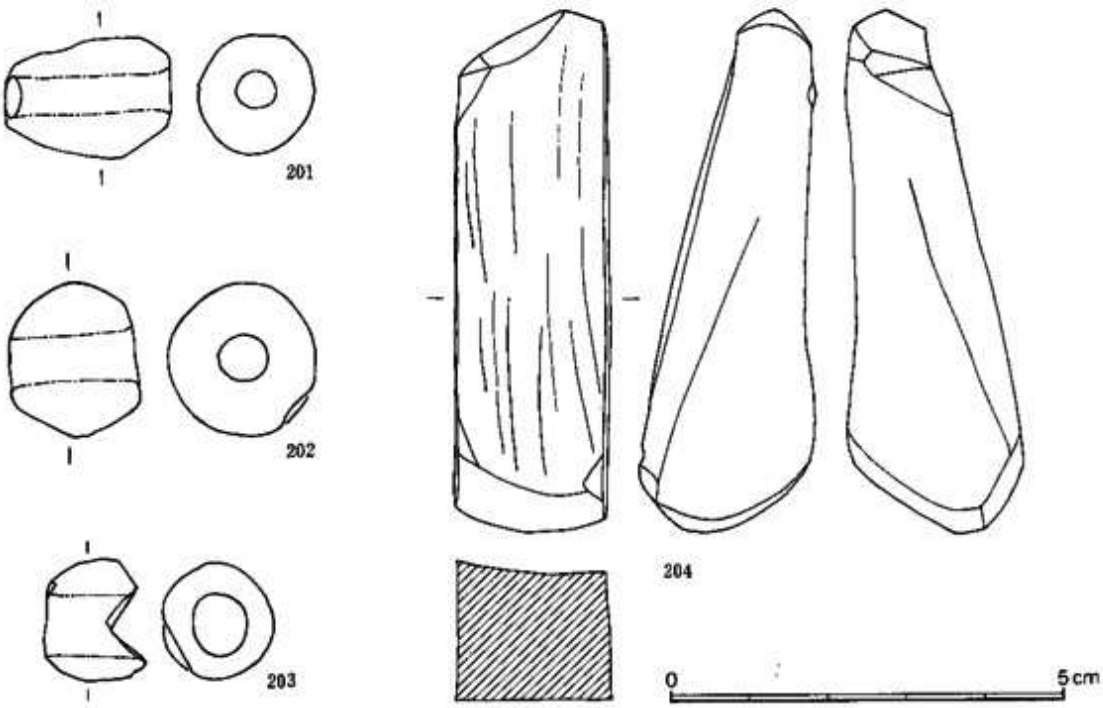
2．その他の遺物

土製品

第5図－201～203。土錘である。

石製品

第5図－204。砥石である。



第5図　柴野遺跡，石堤保育園地区土製品・石製品実測図（1/2）

土錘；201～203，砥石；204

Ⅳ 結　語

今回の調査の遺構・遺物は，弥生時代後期～古墳時代前期のものと，奈良時代～平安時代中期のものに，大きく２区分される。

弥生時代後期～古墳時代前期については，遺構はＳＸ01とした凹地のみで，明確な遺構の検出には至らなかったが，該期の多くの土器が出土した。明確な遺構からの出土状態でないこともあり，一括遺物と言うわけにはいかない。これらの土器群の時期については，月影式期～白江式期に大部分収まるものと推定されるが，これより，やや古い様相を示すものや，新しい段階のものも存在する。当調査地区付近における，弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡や遺物散布地については，西側一帯に拡がっている麻生谷遺跡が上げられる。現在，当調査地区の北東側300ｍと西側450ｍの地点において，多くの土器が出土することを確認している。このことから，この付近には，この時期の大規模集落や，多くの集落があったことを想定させている。また墓域としてこの集落跡に対応するものとしての，弥生時代後期～古墳時代前期の墳丘墓（方形台状墓）や方墳等が，北西側丘陵の古墳群のなかに存在するものと想定される。

奈良時代～平安時代中期については，多くの掘り方や柱穴が検出された。構造物としてまとめたのはＳＡ01とした掘址１条のみであるが，調査面積が少なく，建物址等として認定することが困難であったことによる。今回の調査の状況からは，多くの掘立柱建物址の存在を予想させるものであった。

東側の柴野遺跡と西側の麻生谷遺跡は，一帯のもので，大字の違いにより２つの遺跡として扱っているのに過ぎない。両遺跡の奈良時代～平安時代を検討するのに，この遺跡付近を古代北陸道が通っていた点と，加賀国の深見駅を出て，俱利伽羅峠を越えて（俱利伽羅峠を越えない説もある）越中国に入り坂本駅に至る。そして次の駅である「川合（川人）駅」の推定地が，この遺跡付近である点は，注意を要する。

柴野遺跡南側と麻生谷遺跡西側は，現在の麻生谷集落を取り囲む形で終わっている。これは，宅地化していて，遺物の散布状況を確認することができないためであり，現在の麻生谷集落は微高地上にあり，立地の上からも遺跡地と推定されるものを持っている。当調査地区の遺構も，南側すなわち現在の麻生谷集落の方へも拡がっている可能性は大きい。

川合駅の所在地を，現在把握している遺跡から推定するに，麻生谷集落から西側の石堤集落にかけて，すなわち柴野遺跡の一部を含めて，麻生谷遺跡が候補地に上ってくると言える。

2．石塚遺跡，森田地区

目　　次

Ⅰ　序　　説……13

Ⅱ　遺　　構……17

1．方形周溝墓……17

2．土坑……20

Ⅲ　遺　　物……21

Ⅳ　結　　語……22

挿　図　目　次

第6図　石塚遺跡位置図（1/5万）……13

第7図　石塚遺跡，森田地区位置図（1/5,000）……14

第8図　石塚遺跡，森田地区遺構図（1/200）……15

第9図　石塚遺跡，森田地区方形周溝墓ＳＺ04実測図（1/80）……17

第10図　石塚遺跡，森田地区方形周溝墓ＳＺ05実測図（1/80）……18

第11図　石塚遺跡，森田地区方形周溝墓ＳＺ06実測図（1/80）……19

第12図　石塚遺跡，森田地区弥生土器出土位置図（1/300）……20

Ⅰ 序　説

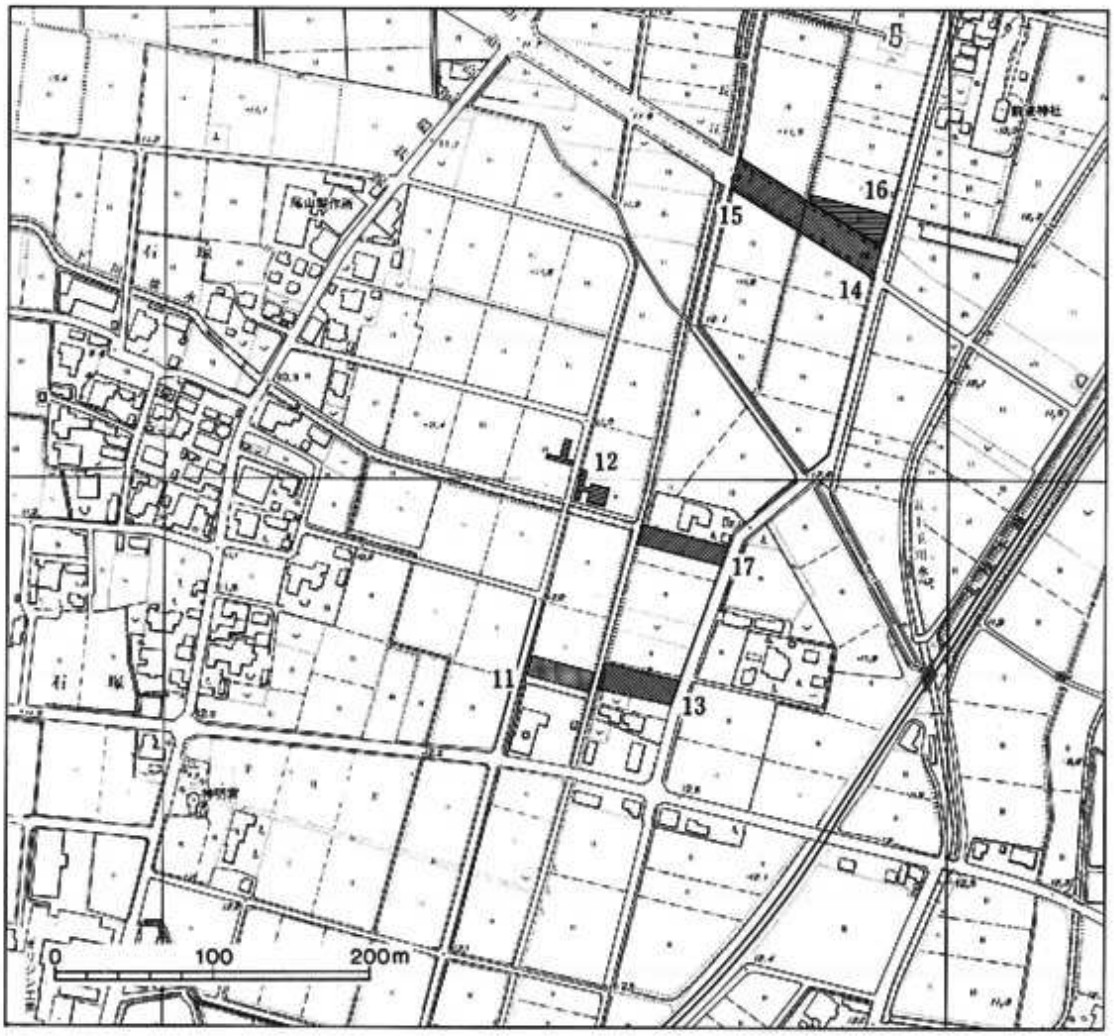
遺跡概観

当「石塚遺跡」は，高岡市街地の南西郊，ＪＲ高岡駅の西南西側約3.0kmに位置する。遺跡の東端部をＪＲ北陸本線が走っている。東側には和田川が，西側には祖父川がそれぞれ北流している。この両河川に挟まれた標高11～12ｍの微高地に当遺跡が立地している。この付近は，県西部の大河，庄川の形成した扇状地の末端部に当たる。和田川，祖父川とも，扇状地特有の湧水を水源とする河川である。

第６図　石塚遺跡位置図（1/5万）

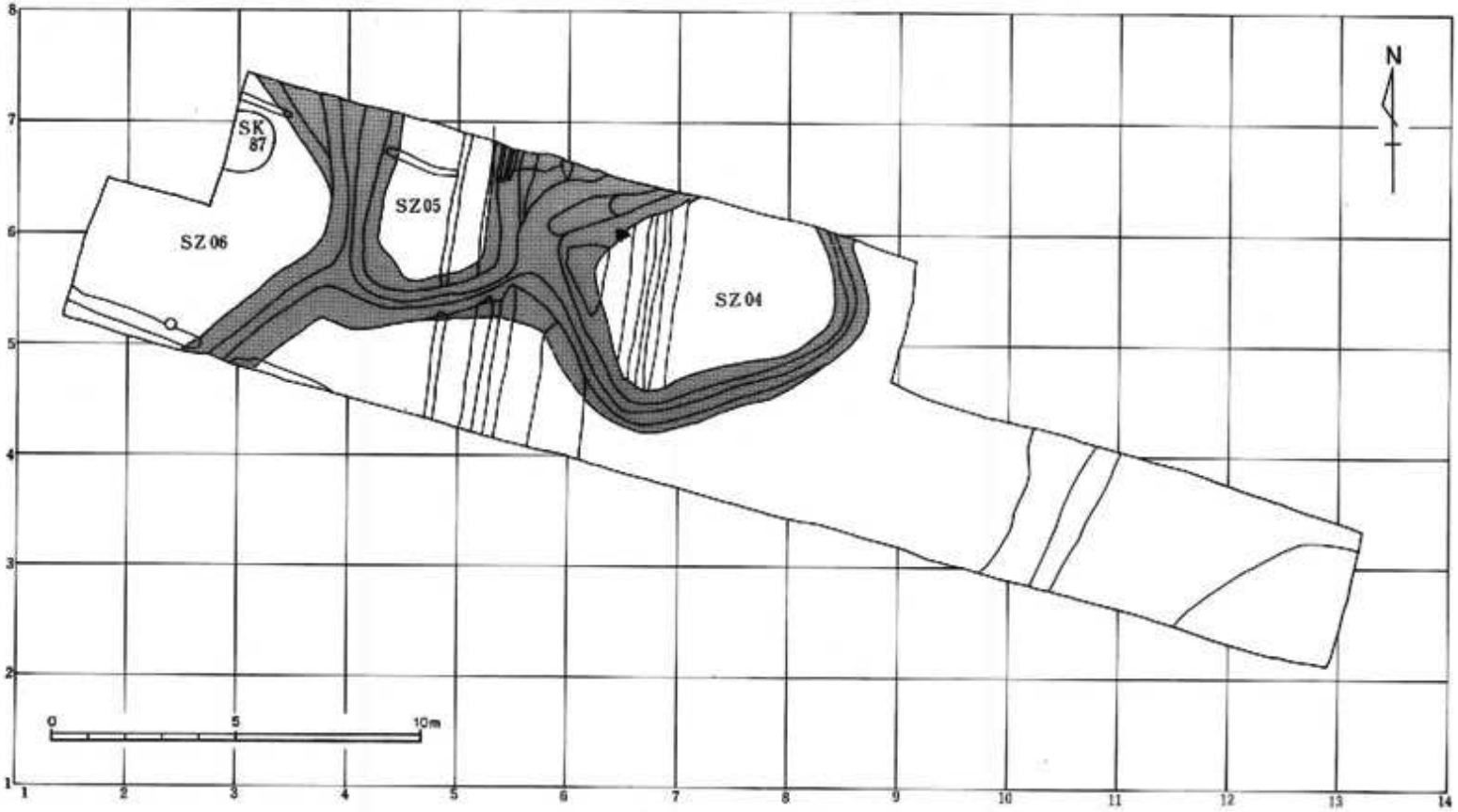
遺跡の範囲は，南北440m×東西470mを計る。当遺跡は，弥生時代前期（？）以来の遺跡であるが，周囲には，縄文時代晩期の遺跡である石塚江之戸遺跡，石塚五俵田遺跡，石塚蜻保遺跡，石塚屋敷田遺跡が分布し，当遺跡の成立基盤がこの時期にあったことが窺える。

当石塚遺跡一帯より，弥生土器をはじめ種々の遺物が出土することは，早くから知られていたが，明確な形で遺跡の存在が確認されたのは，昭和42・43年である。昭和42年に農地改善事業が行われ，遺物が出土した。これを受けて昭和43年に，高岡工芸高等学校地理歴史クラブＯＢ会による発掘調査が行われ，当遺跡が弥生時代中期の遺跡として注目されることになった。



第７図　石塚遺跡，森田地区位置図（1/5,000）

11．平成４年度―森田地区，12．昭和43年度―発掘調査地区，13．昭和56年度―発掘調査地区，
14．昭和61年度―下伏間江・福田線地区，15．昭和62年度―下伏間江・福田線地区，
16．平成３年度―林地区，17．平成３年度―正和化学地区



第8図　石塚遺跡，森田地区遺構図（1/200）

調査に至る経緯

平成４年５月末，市農業委員会からの照会で，当該地における農地転用と駐車場の建設計画を知った。昭和43年発掘調査地区の南側約130ｍの地点であり，遺構が検出される可能性が高い所であった。地主の森田勇助氏，施主の安川憲二氏（安川工業所），仲介の松本豊氏（ラック商事）との協議・承諾を得て，試掘調査を実施することに至り，県費補助事業である「平成４年度市内遺跡試掘調査事業」として実施することになった。

調査経過

試掘調査は，平成３年５月21日から６月９日まで実施した。実働調査日数は６日である。表土の除去はバックフォーで行い，場内に積み上げた。その後，遺構の確認や掘り下げ，記録の作成を行った。土盛りによる駐車場造成という，直接遺構を掘削する工事内容でないため，試掘調査のみで止めること，このため試掘調査とはいえ，できるだけ広く発掘する方針で調査に臨んだ。調査地区は安川工業所の北側に接している水田で，調査対象面積521㎡を計る。発掘は敷地の北側寄りで実施した。試掘調査面積は212㎡である。

検出遺構

検出遺構は以下のとおりである。

方形周溝墓３基（ＳＺ04～06）

土坑１基（ＳＫ87）

遺構の番号は，先に調査を実施した「昭和61度―都市計画道路下伏間江・福田線地区」「昭和62度―都市計画道路下伏間江・福田線地区」「平成３年度―林地区」「平成３年度―正和化学地区」からの連番である。

出土遺物

出土遺物は弥生土器のみである。

グリッド

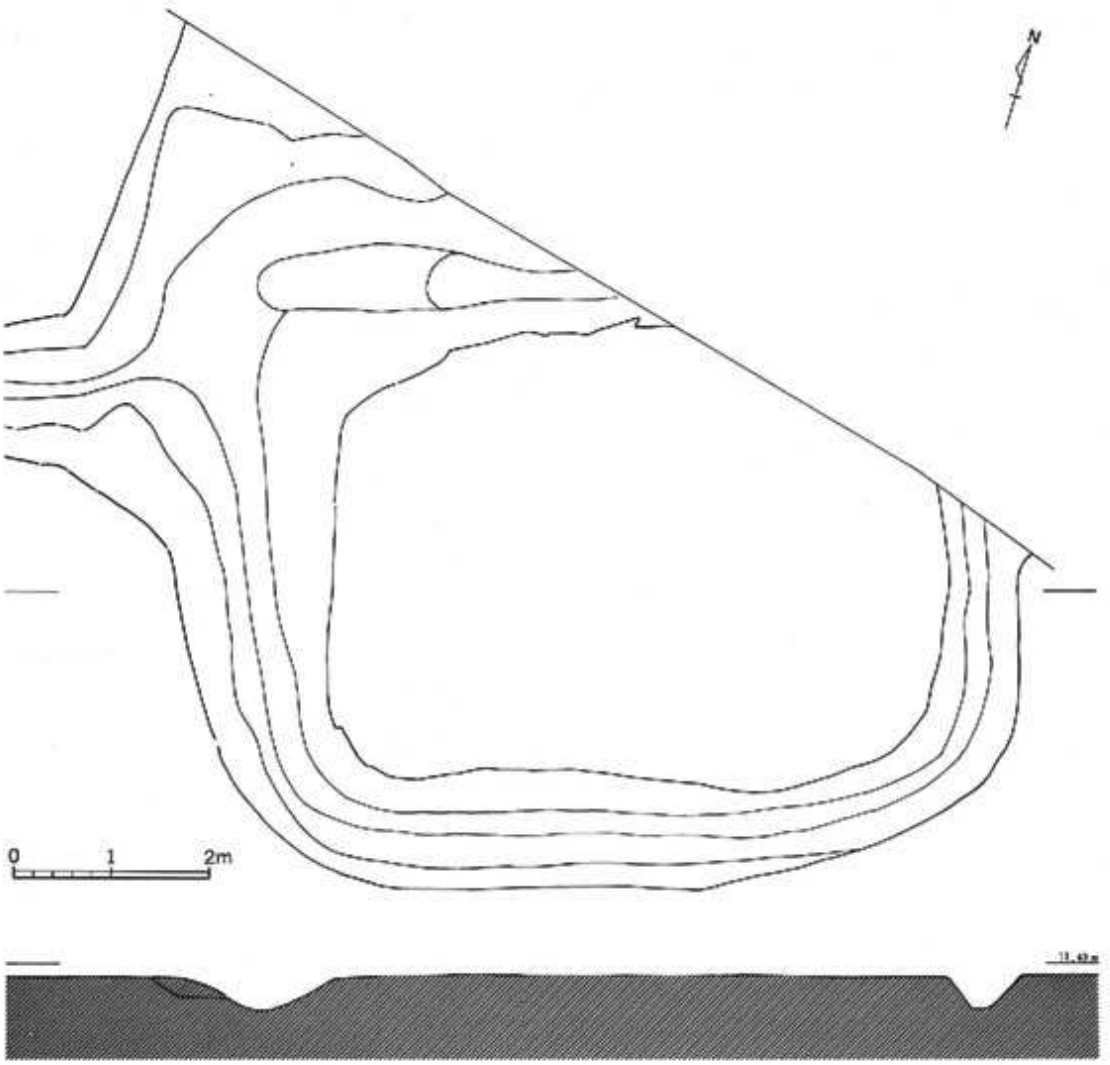
調査地区のグリッドは平面直角座標系に合わせた。Ｘ＝１，Ｙ＝１の地点は，原点より，西へ16,265ｍ，北へ80,865ｍの位置である。このグリッド番号については，この地区のみの表示とした。

Ⅱ 遺　構

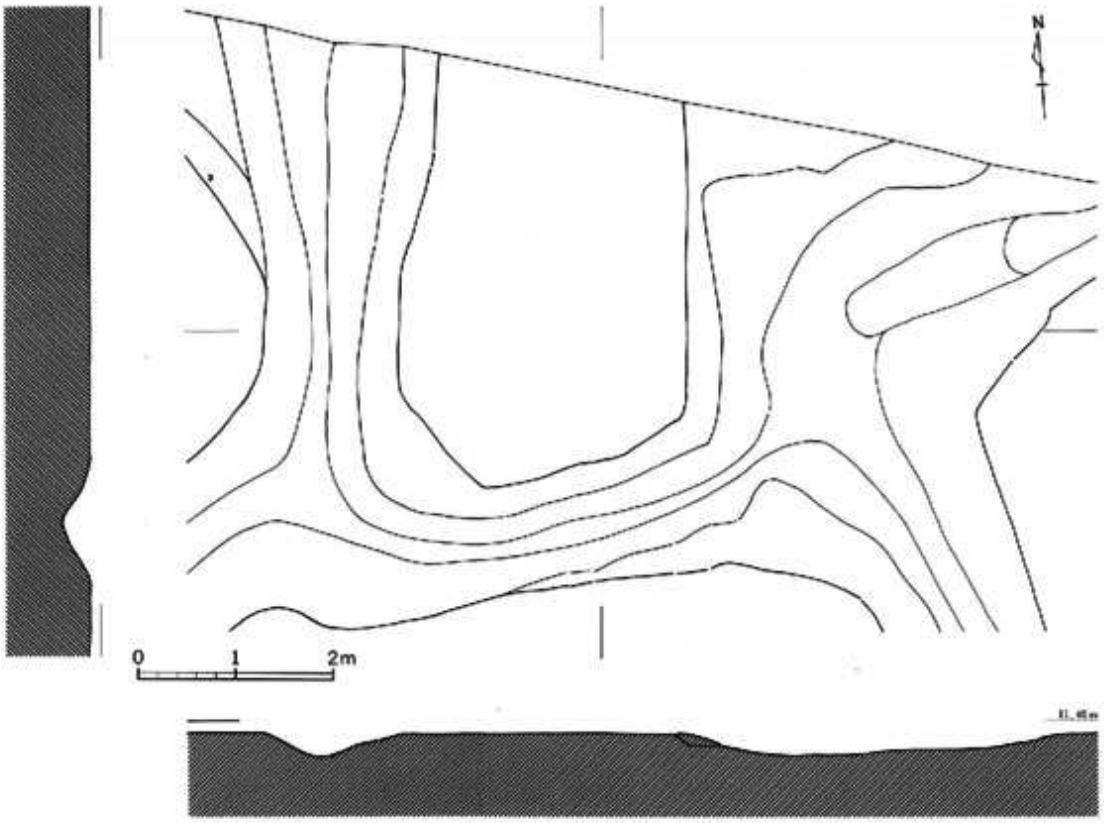
1．方形周溝墓

ＳＺ04

調査地区の中央北側で検出された方形周溝墓。西側は方形周溝墓ＳＺ05と溝を共有し，北東側は調査地区外になる。西側の一部は撹乱に切られている。溝は，上面幅70～170cm，底面幅20～



第９図　石塚遺跡，森田地区方形周溝墓ＳＺ04実測図（1/80）



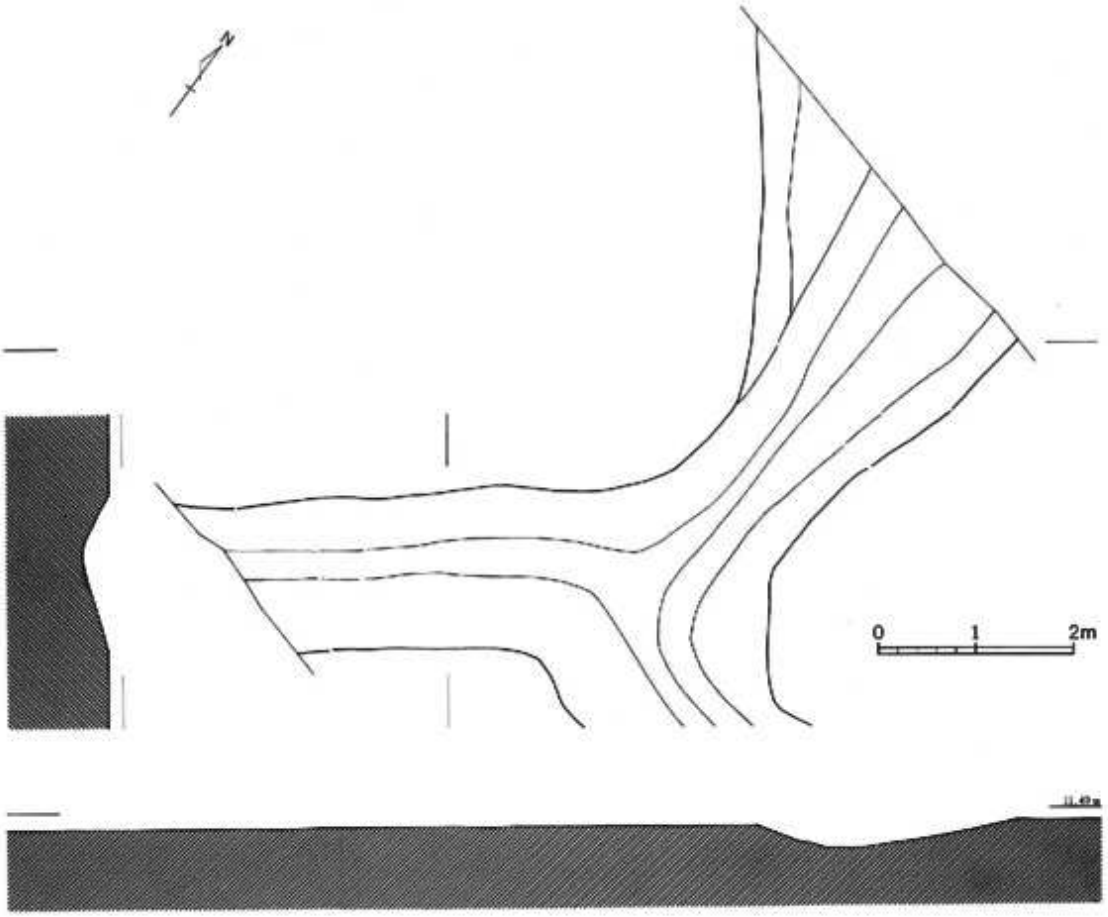
第10図　石塚遺跡，森田地区方形周溝墓ＳＺ05実測図（1/80）

30cm，深さ16～42cmを計る。墳丘の規模は，南北が，上場で4.5m，下場（溝の内側の裾部）で5.2m，周溝外端で7.2m以上を計り，東西が，上場で6.3m，下場で7.2m，周溝外端で8.6mを計る。周溝の覆土は，黒褐色土の単一層であった。

出土遺物は弥生土器である。302～303（第12図の02・03）は，墳丘部の西側隅部の北東寄りで出土したものである。この２点の土器は，墳丘部に食い込むような形で出土しており，この周溝が構築される以前からあった土坑のような遺構の所属である可能性が強い。307は周溝の南東部から出土している。

ＳＺ05

調査地区の北西側で検出された方形周溝墓。東側は方形周溝墓ＳＺ04と溝を共有し，西側は方形周溝墓ＳＺ06と溝を共有している。一部は攪乱に切られている。溝は，上面幅110～150cm，底面幅10～30cm，深さ16～28cmを計る。墳丘の規模は，南北が，上場で4.2m以上，下場で4.6m以上，周溝外端で5.4m以上を計り，東西が，上場で2.9m，下場で4.5mを計る。周溝の覆土は，黒褐色土の単一層であった。



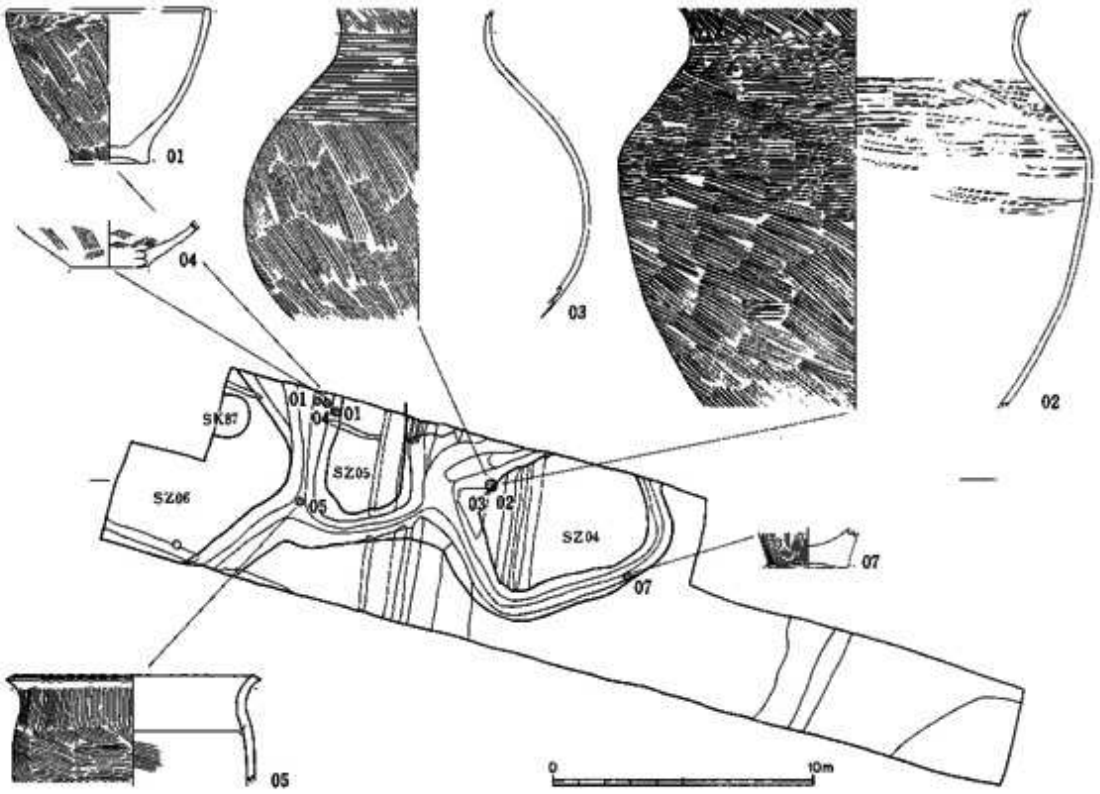
第11図　石塚遺跡，森田地区方形周溝墓ＳＺ06実測図（1/80）

出土遺物は弥生土器である。301.304.305（第12図の01・04・05）の３点で，西側の周溝部，すなわち，ＳＺ06との共有部分から出土している。覆土は，黒褐色土の単一層であった。

ＳＺ06

調査地区の西側端部で検出された方形周溝墓。東側は方形周溝墓ＳＺ05と溝を共有し，西側は調査地区外になる。墳丘内にはＳＫ87がある。一部は攪乱に切られている。溝は，上面幅160～165cm，底面幅30～40cm，深さ23～26cmを計る。墳丘の規模は，北東～南東が，上場で8.1ｍ以上，下場で8.4ｍ以上を計り，北西～南東が，上場で4.9ｍ以上，下場で5.4ｍ以上，周溝外端で，6.5ｍ以上を計る。

出土遺物は弥生土器である。301.304.305（第12図の01・04・05）の３点で，東側の周溝部，すなわち，ＳＺ05との共有部分から出土している。



第12図　石塚遺跡，森田地区弥生土器出土位置図（1/300）

2．土　坑

SK87

方形周溝墓ＳＺ06の墳丘内から検出された。このＳＺ06に所属するかどうか不明なため，一応独立した遺構として扱った。西側は調査地区外になり，また掘り下げは行っていない。径120cmの円形土坑の可能性がある。

Ⅲ 遺　物

出土遺物は弥生土器である。図面７・８に８点示した。８点の内６点，301～305.307は方形周溝墓の周溝内からの出土であり，第12図に出土位置を明示した。他の２点，306.308は表土からの出土である。

弥生土器は，１点（302）が条痕文系の土器であり，他の７点は櫛描文系の土器である。器形的には，鉢・壺・甕である。

301　鉢。口径15.3cm，器高12.3cm，底径5.6cm。揚げ底の底部より，口縁・体部は内弯して立ち上がる。内面はナデ，外面は刷毛目である。口端部や底面もナデである。口縁・体上部６分の１，体下・底部が残存している。

302　壺。残存器高30.8cm，胴部最大径36.4cm。上胴部が張る器形である。内面はナデで，一部に条痕が付く。外面は条痕文で，口縁下部に３条の波状文が付く。口縁下部・胴部が残存している。口縁上部と底部は欠損している。

303　壺。残存器高24.1cm，胴部最大径26.6cm。球形の胴部にやや長い頸部が付く形態である。内面はナデ，外面は刷毛目で，頸部に櫛描き直線文が付く。櫛は９～10条が１組みと思われる。頸部・胴上部と胴中央部・胴下部２分の１が残存している。

304　壺。残存器高3.5cm，底径6.0cm。壺の底部で，内外面ともナデで一部刷毛目が付く。胴下・底部少量が残存している。

305　甕。口径18.2cm，残存器高8.4cm。残存量が少なく，傾きは不明確であるが，肩部の張りは少ないものと思われる。口縁部は外反して立ち上がり，外傾する口唇帯を作っている。口唇帯には，櫛状具による刺突文が付く。内面は横ナデ・ナデで，一部刷毛目が付く。外面は刷毛目である。口縁・胴上部が少量残存している。

306　甕。残存器高12.0cm，底径6.0cm。甕の底部である。胴下部は，内面がナデ，外面が刷毛目である。底部はナデである。胴下・底部が少量残存している。

307　甕。残存器高3.1cm，底径6.0cm。甕の底部である。内面がナデ，外面が刷毛目である。胴下・底部４分の３が残存している。

308　甕。残存器高3.0cm，底径5.4cm。甕の底部である。全体的に剥離・磨滅している。胴下・底部４分の３が残存している。

Ⅳ 結　語

今回検出した溝状の遺構を，主体部（埋葬施設）は確認していないものの，周溝の一部を共有する３基の方形周溝墓と判断した。

この方形周溝墓の時期については，弥生時代中期のものと考えている。石塚弥生遺跡は，弥生時代中期，とくに北陸地方における小松式土器の段階，すなわち畿内第３様式期を中心としており，今までの調査により，土坑（土壙墓？）等の遺構が検出されている。このような時期の遺跡であるので，弥生時代中期の方形周溝墓が存在する状況にあった遺跡と言い得る。

今回出土した弥生土器は，大きくみて中期のものとして間違いのないものであり，他の時期の遺物が出土していないことから，方形周溝墓を中期のものとした。しかし，より厳密に検討する場合やや問題もある。東側の方形周溝墓ＳＺ04から出土した弥生土器の壺，302と303のことである。この２個体の土器は，出土状態からは同時期のものと言い得る。しかし，ＳＺ04に所属するかどうかについては微妙であり，現地調査では明確にすることができなかった。ただ，ＳＺ04を切り込む遺構の存在が，否定できる点と，ＳＺ04の構築以前の遺構（土坑？）が存在し，これに所属していた可能性が指摘できることである。

302と303は，一方が条痕文系土器で，他方が畿内的な櫛描文系土器と対照的である。北陸における弥生土器編年研究の成果に照らすと，弥生時代中期初頭，畿内第２様式との併行期に該当しよう。方形周溝墓の溝の中から出土した301.304.305.307や表土出土の306.308は，中期中葉，畿内第３様式との併行期としてよいであろう。

このことから，方形周溝墓とした遺構については，遡っても中期初頭で，一応中期中葉のものとしておく。

当石塚遺跡からは，遠賀川式土器の出土が報じられているが，前期のものとは断言できないと思われ，今回の302と303のことも考慮して，現状では石塚弥生遺跡は，中期初頭に始まり，次の中期中葉に至り拡大したものと理解できる。当遺跡の範囲については，従来規模が大きいことが指摘されてきたが，今回その南端部で遺構が検出されたことにより，南北が350ｍに達することが確実になったと言える。

3．山園町遺跡，院内社参道地区

目　　次

Ⅰ　序　　説……25
Ⅱ　遺　　構……28
　地下式壙……28
Ⅲ　遺　　物……30
Ⅳ　結　　語……31

挿　図　目　次

第13図　山園町遺跡位置図（1/5万）……25
第14図　山園町遺跡，院内社参道地区位置図（1/5,000）……26
第15図　山園町遺跡，院内社参道地区地下式壙S Z01実測図（1/60）……29
第16図　山園町遺跡，院内社参道地区中世土器類実測図（1/3）……30

Ⅰ 序　説

遺跡概観

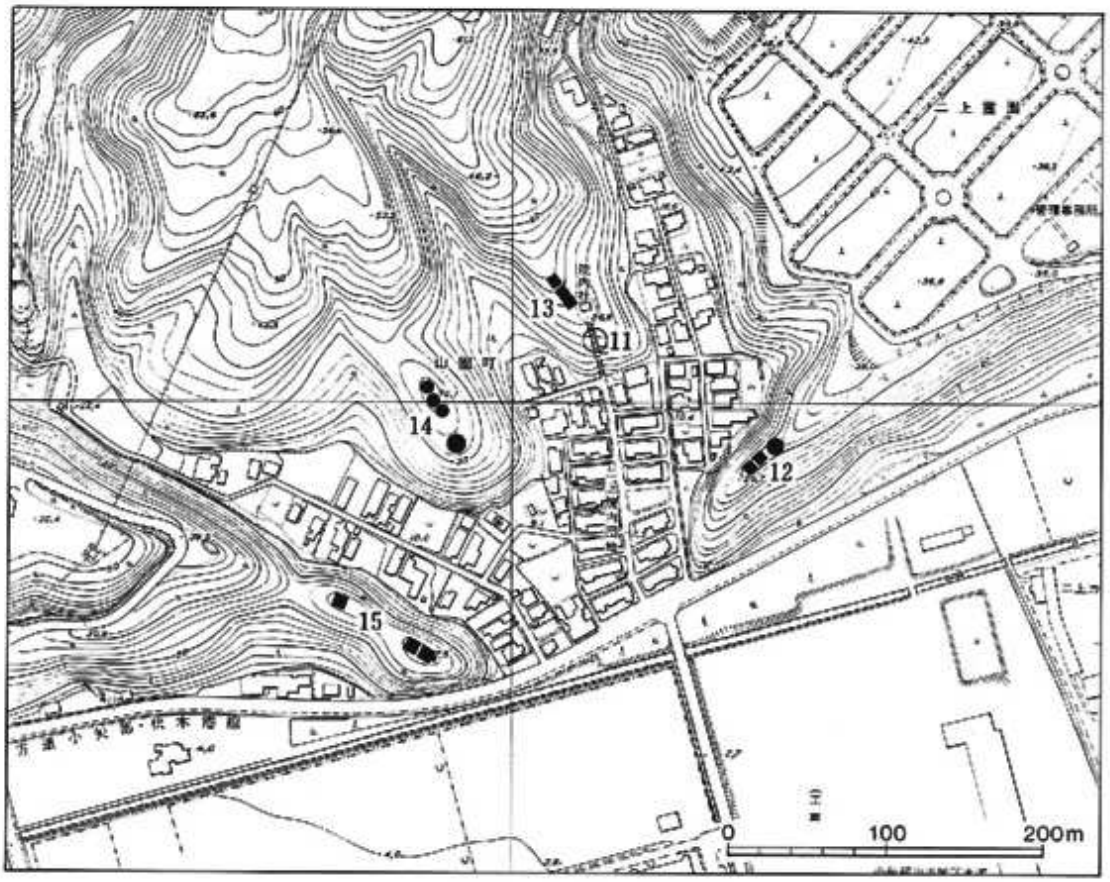
高岡市街地の北側に聳える二上山の南麓には，多くの古墳群と集落遺跡・遺物散布地が分布する。この内の一つが当「山園町遺跡」である。遺跡の所在するところは山麓部の丘陵に囲まれた狭隘な谷部で院内と呼ばれていた。近年宅地化され山園町と命名された。宅地化の時，土器類が多く出土したとされている。現在も土師器・須恵器・珠洲などが若干採集できる。住宅地の奥の丘陵上に，射水神社の摂社である院内社が鎮座している。

第13図　山園町遺跡位置図（1/5万）

遺跡の範囲は，谷部全体と付近の丘陵の一部であると推定される。この山園町の谷部へ向かってくるようなかたちで，二上山の丘陵尾根部の最末端が延びてきている。そして，それぞれの尾根上に古墳群が分布している。東より，城光寺古墳群Ｃ支群，院内古墳群Ａ支群，院内古墳群Ｂ支群，鳥越古墳群Ｃ支群である。

調査に至る経緯

院内社は菊理媛命を祭神として，古代より当地に鎮座していると伝えられている。現在，山園町，院内の２つの町で祭られている。昭和44年に社殿等の整備が図られたが，参道が急勾配のため，氏子の参詣等を困難にしていた。そこで，平成４年10月に両町の氏子の寄進により，参道の整備工事が実施されることになった。10月18日に工事が開始された。10月28日に参道脇に電柱を敷設中の電気工事店が地下に空洞（穴）があることに気付いた。29日に地元関係者により，この「穴」の拡がり確認のボーリング調査が実施された。11月８日には地元関係者により「穴」の試



第14図　山園町遺跡，院内社参道地区位置図（1/5,000）

11.山園町遺跡，院内社参道地区，12．城光寺古墳群Ｃ支群，13．院内古墳群Ａ支群，
14.院内古墳群Ｂ支群，15.鳥越古墳群Ｃ支群

掘調査が実施された。第15図に示した東側玄室部上の坑は，この時の試掘坑である。11月13日に至り射水神社を通じて，この「穴」のことが市教育委員会社会教育課へ報告された。同日，社会教育課の担当者が現地へ出向き確認した。14日には，このことが「なぞの穴」として地元の新聞紙上で報じられ，多くの人の注目を集めることになった。

この参道整備工事は，直接遺構を破壊する内容ではないが，地下にある空洞のため陥没する危険があり，早急に土砂などをいれて安全を図る必要があった。また，調査をしなければ文字どおり「なぞの穴」のままとなるので，県埋蔵文化財センターの指導と院内社総代の筏井与史男氏をはじめとする地元関係者の了承を得て，緊急に発掘調査を実施することに至った。調査費用は，市費を当てることにすると共に，射水神社からも経費の一部の協力を得た。

調査経過

発掘調査は，平成4年12月1日から12月11日まで実施した。実働調査日数は7日である。各々の経過は以下のとおりである。

12月1日　発掘調査開始，参道部分から掘り下げる。
12月2日　昨日に引き続いて，掘り下げ。
12月3日　掘り下げ，及び遺構の清掃。報道機関に公表。
12月4日　写真撮影。
12月5日　図面作成。
12月6日　地元住民対象の現地説明会の開催。
12月7日　射水神社宮司による御祓。
12月9日　埋め戻しのためのベルトコンベアーの設置。
12月10日　空洞部分に川砂の充填，埋め戻し。
12月11日　ベルトコンベアーの撤去。

調査概要

調査地点は，院内社参道の中程，標高約21mの所である。参道の上り口との比高差は約6mである。調査対象はこの「なぞの穴」である。11月13日に確認した時点で「中世地下式壙」と判断したので，この視点からの調査となった。　地元関係者の試掘した坑は，参道の東側で，玄室部（地下室部）の空洞部分に達していた。入口部が，この西側すなわち参道直下に位置していることは確実であった。この観点で発掘を進めたが，参道の西側にも玄室部（地下室部）があり，天井部が崩落していることが判明した。これについては，その一部を確認したのみである。玄室部については，それぞれ，東側玄室部，西側玄室部と呼称することにする。

出土遺物は，参道下からの土器類のみで，土師器1点，珠洲3点，瀬戸1点である。

Ⅱ 遺　構

地下式壙

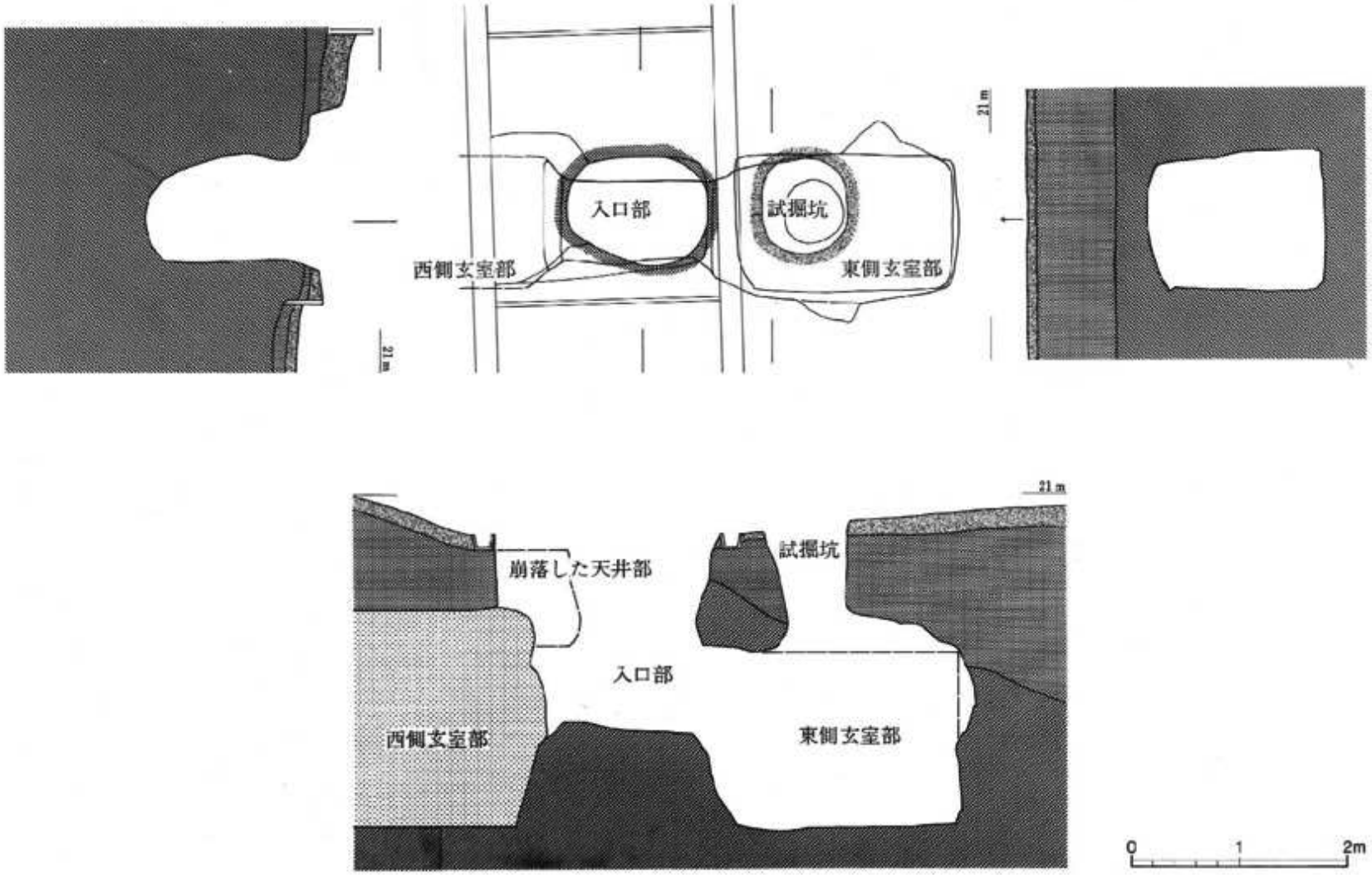
SZ01

入口部　入口部は参道の下に位置する。参道の工事等のため，地表下約20cmは土層が乱れていた。その下からが現存の入口部と言うことができる。上面形は楕円形を呈する。規模は短軸（南北）が1mを計る。長軸（東西）は西側玄室の天井部が崩落していたため，明確ではないが，約1.30mを計る。地表面より1.60mで底面に達する。底面は幅70cm，長さ1.40mを計り，東側へ向かってやや傾斜している。

羨道部　明確な羨道部は存在しない。入口部と東側玄室部との間に，羨門部とでも呼ぶべき所がある。この部分は幅70～80cm，長さ20cm，高さ80cm～100cmを計る。

東側玄室部　参道の東側に位置する。入口部の東側に拡がる玄室部であるので，東側玄室部と称しておく。形態は平面・立面とも長方形である。後述のとおり若干の崩れがあるので，復元した数値で規模を示す。長さ2.30m（天井部及び，底面より60～70cm上での計測値），底面の長さ2m，幅1.20～1.30m，高さ1.60m。発掘調査の開始以前に，地元関係者による試掘が実施され，その時の坑が玄室の中央北西寄りに位置する。この試掘の時の土砂が玄室内にたまっており，また試掘による掘削の後，多くの人が試掘坑より出入りし，入口部を探して壁がたたかれた。このために崩落した土砂もたまっていた。玄室部から羨門部・入口部を見るに，土がここへ当初充填されたままの状態であり，羨門部・入口部からの土の流入はほとんどなかったものと判断された。また天井部の自然の崩落による土も少なく，本来良好な状態で，玄室部が遺存してきたものと判断された。玄室部が設置された所は，表土の下の黒褐色土層のさらに下の，黄褐色粘質土層である。これは新第3紀層であり，この付近の基盤層になっているものである。このような安定した土層内に築かれたものと判断される。

西側玄室部　参道の西側に位置する。入口部の西側に拡がる玄室部と推定されるので，西側玄室部と称しておく。当初単純に考え，入口部の一方のみに玄室部が付く単室構造のものを想定して調査を進めたが，入口部の西側の範囲が明確に把握できず疑問を持っていた。入口部の土をほとんど掘り上げた段階で，この西側玄室部のことに気付いた。入口部の西側は，天井部を構成する黄褐色粘質土層が崩れた状態で存在した。また入口部の底面においても，玄室部への移行を示す部分（羨門部）を確認することができ，玄室の存在を推定するに至った。この西側玄室部については，簡単に調査を実施できる状態でないことや，当初に予定した調査目的を達したと判断したので，これ以上の掘り下げはしなかった。このため，西側玄室部の規模は不明で，第15図で示したラインも，東側玄室部を参考とした想定線である。



第15図　山園町遺跡，院内社参道地区地下式壙ＳＺ01実測図（1/60）

Ⅲ 遺　物

遺物の出土位置

出土した遺物は中世の土器類のみである。出土位置は入口部の上方からである。玄室部からの遺物の出土はない。

土師器

第16図の401。土師器の皿。口径8.6cm，器高1.7cm。丸い底部より，口縁部は外反する。内面と口縁部外面が横ナデ，底部外面がナデ。少量残存。

珠洲

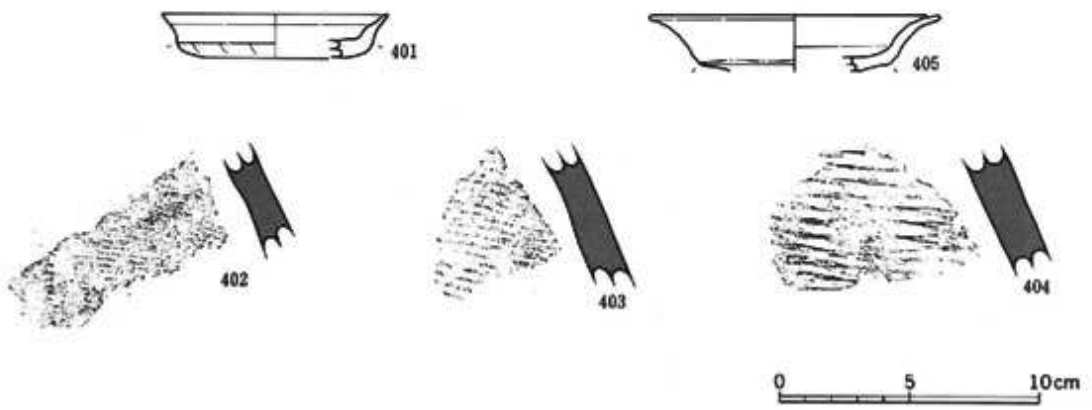
第16図の402。珠洲の甕の胴部片，外面には細かい叩き目が付く。

第16図の403。珠洲の甕の胴部片，外面には荒い叩き目が付く。

第16図の404。珠洲の甕の胴部片，外面には荒い叩き目が付く。

瀬戸

第16図の405。瀬戸の高台付稜皿。口径11.0cm，器高2.2cm。高台部は欠損しているが，僅かに移行部が確認できる。口縁部は外面に稜をなして外反して，外上方へ拡がる。外面は稜の所までヘラ削りしている。淡緑色の灰釉は，内面全体と外面の稜の所まで付いている。5分の1残存。



第16図　山園町遺跡，院内社参道地区中世土器類実測図（1/3）

土師器；401，珠洲；402～404，瀬戸；405

Ⅳ 結　語

今回，山国町遺跡で検出された「なぞの穴」を，「地下式壙」すなわち中世の墳墓の一種としての地下式壙として認識して記述してきた。

地表より竪穴を穿ち入口部とし，横へ掘り進んで地下に「室」を形成している遺構は，地下式壙，地下式土壙，地下式横穴，地下式土倉等と呼ばれ，一応中世～近世の遺構であるとの点では，ほぼ理解の一致をみていると言える。しかし，その性格については，墳墓とする考えと，貯蔵庫・倉庫とする考えとを中心に意見が分かれている。これまでの研究成果により，これらの中には，中世，とくに中世後期の所産で，墳墓と考えるのが妥当である遺構があること，また，近世頃のもので，地下式の倉庫であるものがあること等が判明してきている。少なくとも，中世の地下式の墳墓があるものと理解している。

墳墓にしろ，貯蔵庫・倉庫とするにせよ，同じような手作業による掘削をしており，地下に室を設定する目的のため，性格が違っても，形態が極めて類似するものが存在するのである。特に中世の地下式の墳墓に類似する，地下式の倉庫がある点注意を要し，形態以外の面からも検討しなければならない。

今回の遺構も，直接性格を示すものはないが，いわゆる中世地下式壙に形態等で類似していることを前提に，以下の点で，墳墓としての中世地下式壙と考えた。

1．玄室部から出土遺物がない。遺物が出土しないか，極めて少ないことが中世地下式壙のの特徴と認識。

2．入口部は土で閉塞されていた。

3．入口部に出入りのための施設が確認されないこと。

4．羨門部は出入りし易いほど大きくないこと。

5．入口部の上方で，中世の遺物が出土している。近世～現代の遺物は出土していない。

6．奥まった丘陵上に立地している。この遺構のやや上方の丘陵上には，古墳や神社が位置しており，宗教的なものが設置される環境にあること。

7．少し離れたところに横穴墓（二上横穴墓群）があることが示しているように，単なる倉庫なら，地下式にしなくても，横穴方式で十分な地区であること。

地下室，すなわち玄室が２つあるが，これについては，墳墓説を否定する材料かもしれない。これについては，西側玄室は崩壊した状態で検出されており，構築当初に崩れ，そのため東側に改めて玄室を設けたとも理解できる。

以上，今回の遺構を中世地下式壙としたことに関して述べてきた。時期については，出土した土器類から，中世後期，15世紀頃のものと考えたい。

参考文献

上坂成次・上野章　1968　「高岡市石塚遺跡発掘調査概報」『オジャラ』3　富山県立高岡工芸高等学校地理歴史クラブO・B会

上野章　1986　「高岡市石塚遺跡出土の壺」『埋文とやま』第16号　富山県埋蔵文化財センター

江崎武　1985　「中世地下式壙の研究」『古代探叢』II　早稲田大学出版会

小田木治太郎　1989　「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」『石川考古学研究会々誌』第32号　石川考古学研究会

木下良ほか　1980　「富山県歴史の道調査報告書—北陸街道—」　富山県教育委員会

小林賢太郎　1978　「越中国」『古代日本の交通路』II　大明堂

中田英　1977　「地下式壙研究の現状について」『神奈川考古』第2号　神奈川考古学会

半田堅三　1979　「本邦地下式壙の類型学的研究」『伊知波良』2　伊知波良刊行会

久田正弘　1991　「北陸地方西部の大洞C2式～大洞A'式直後の土器編年」『第1回東日本埋蔵文化財研究会—東日本における稲作の受容』東日本埋蔵文化財研究会

安英樹　1990　「北陸における第I・II様式の弥生土器」『石川考古学研究会々誌』第33号　石川考古学研究会

谷内尾晋司　1983　「北加賀における古墳出現期の土器について」『石川考古学研究会々誌』第26号　石川考古学研究会

湯尻修平　1983　「柴山出村式土器について」『石川考古学研究会々誌』第26号　石川考古学研究会

古岡康暢　1991　「北陸弥生土器の編年と画期」『日本海域の土器・陶器〔古代編〕』六興出版

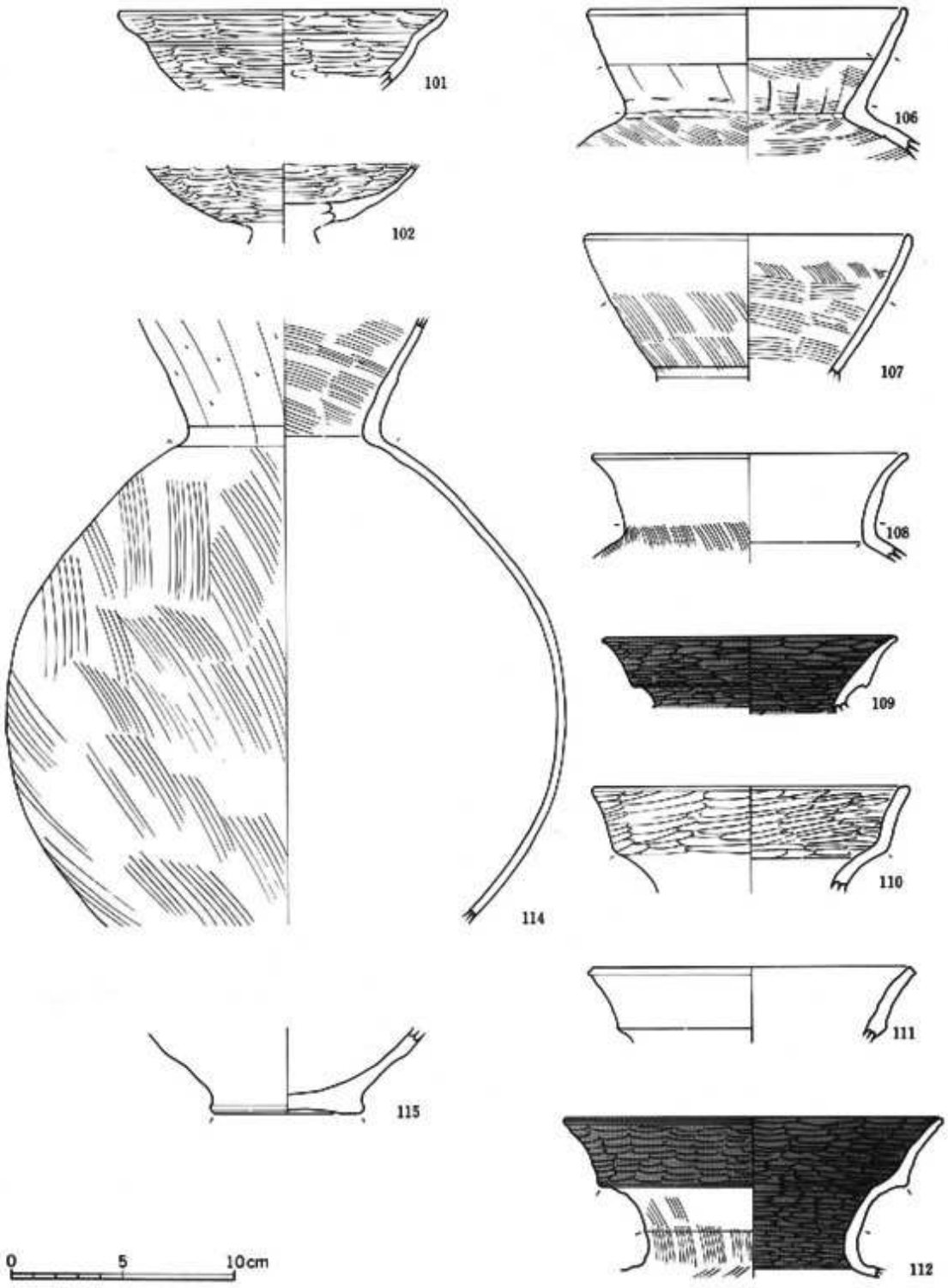
調査参加者名簿

発掘　稲場由美子，大嶋成子，岡島敏雄，小林茂，篠田鉄次，杉本広政，寺徒一大，高倉鶴蔵，高田えみ子，高田幸治，高田富雄，高田弘義，前田武國，松井弘子，松村孟，水外一郎，宮下真知子

整理　稲場順子，稲場山美子，大谷知可子，岡田幸子，高田えみ子，高岡端央，寺井久子，道谷美奈子，橋真理子，姫野さおり，三島幸代

図　　面

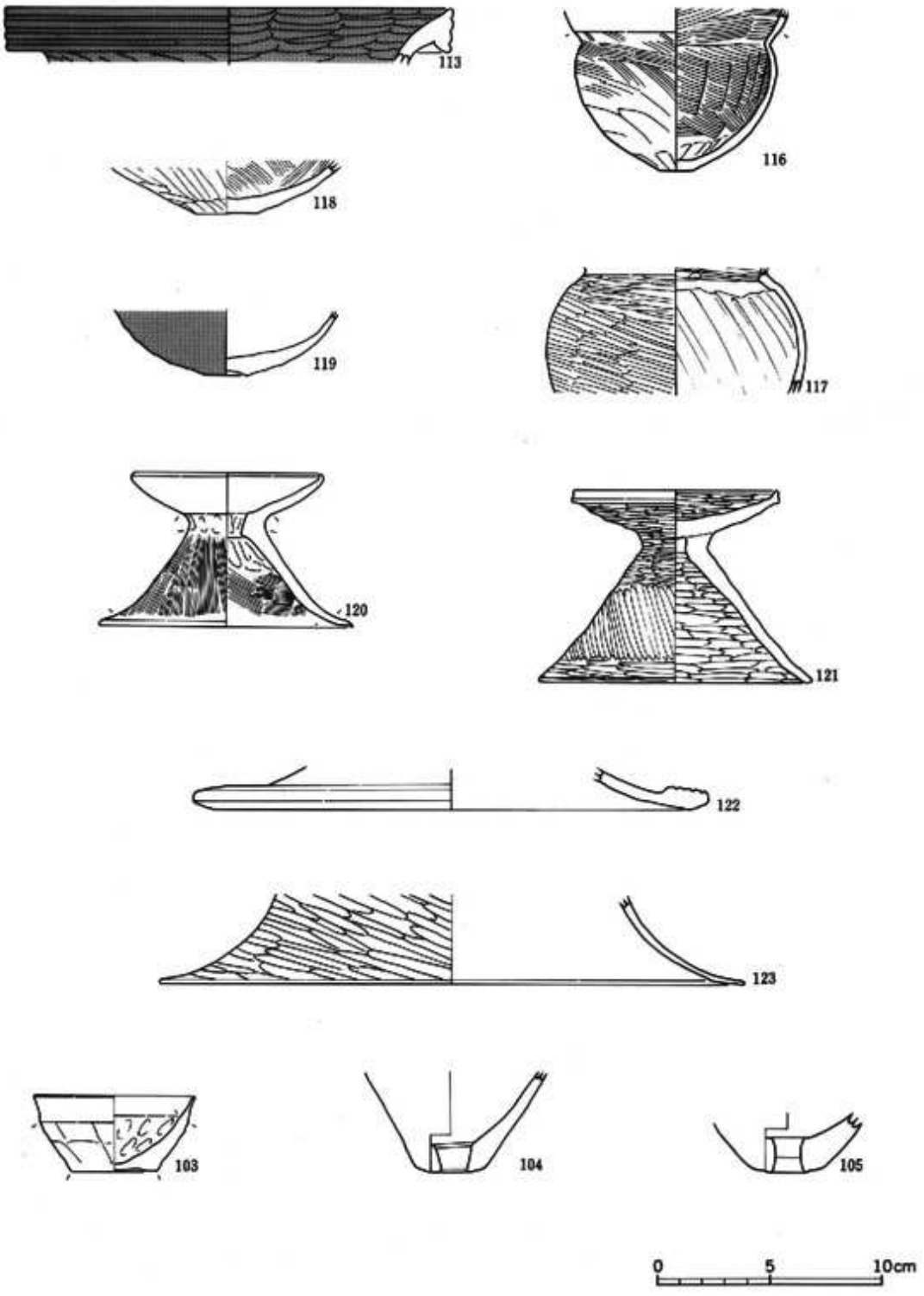
図面1　遺物実測図　柴野遺跡　石堤保育園地区



弥生土器・古式土師器

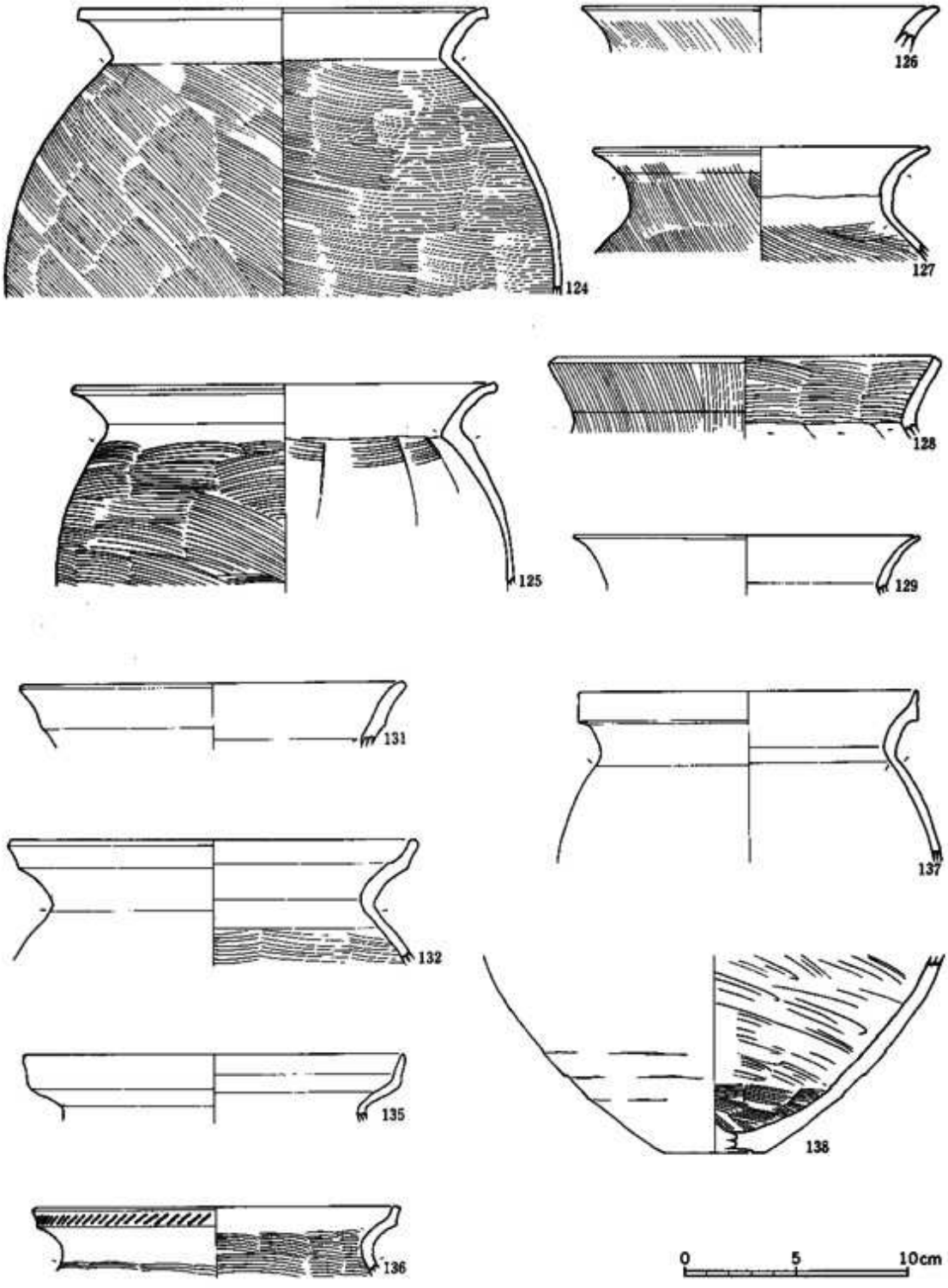
縮尺1/3

図面2　遺物実測図　柴野遺跡　石堤保育園地区



弥生土器・古式土師器

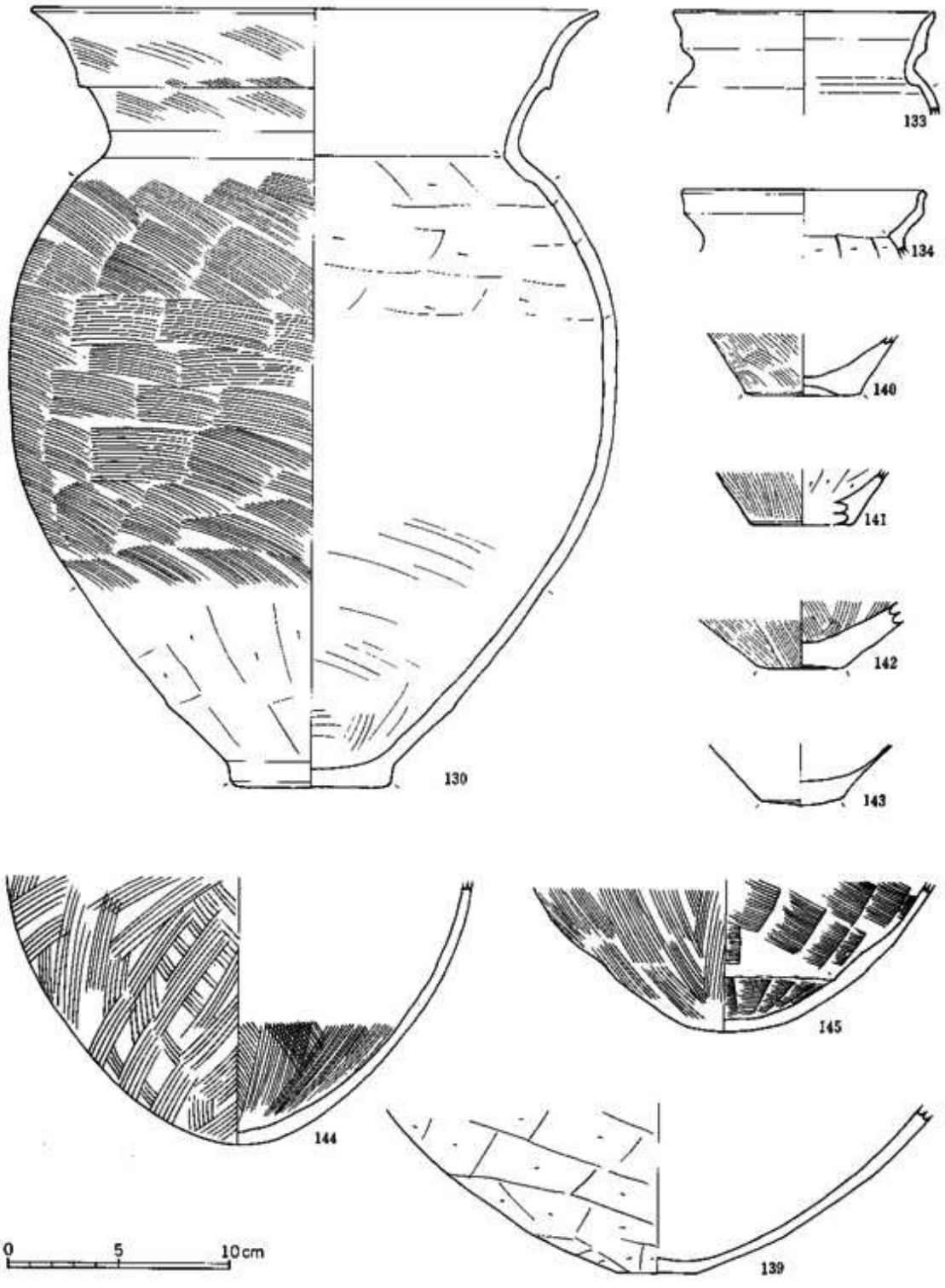
縮尺1/3



弥生土器・古式土師器

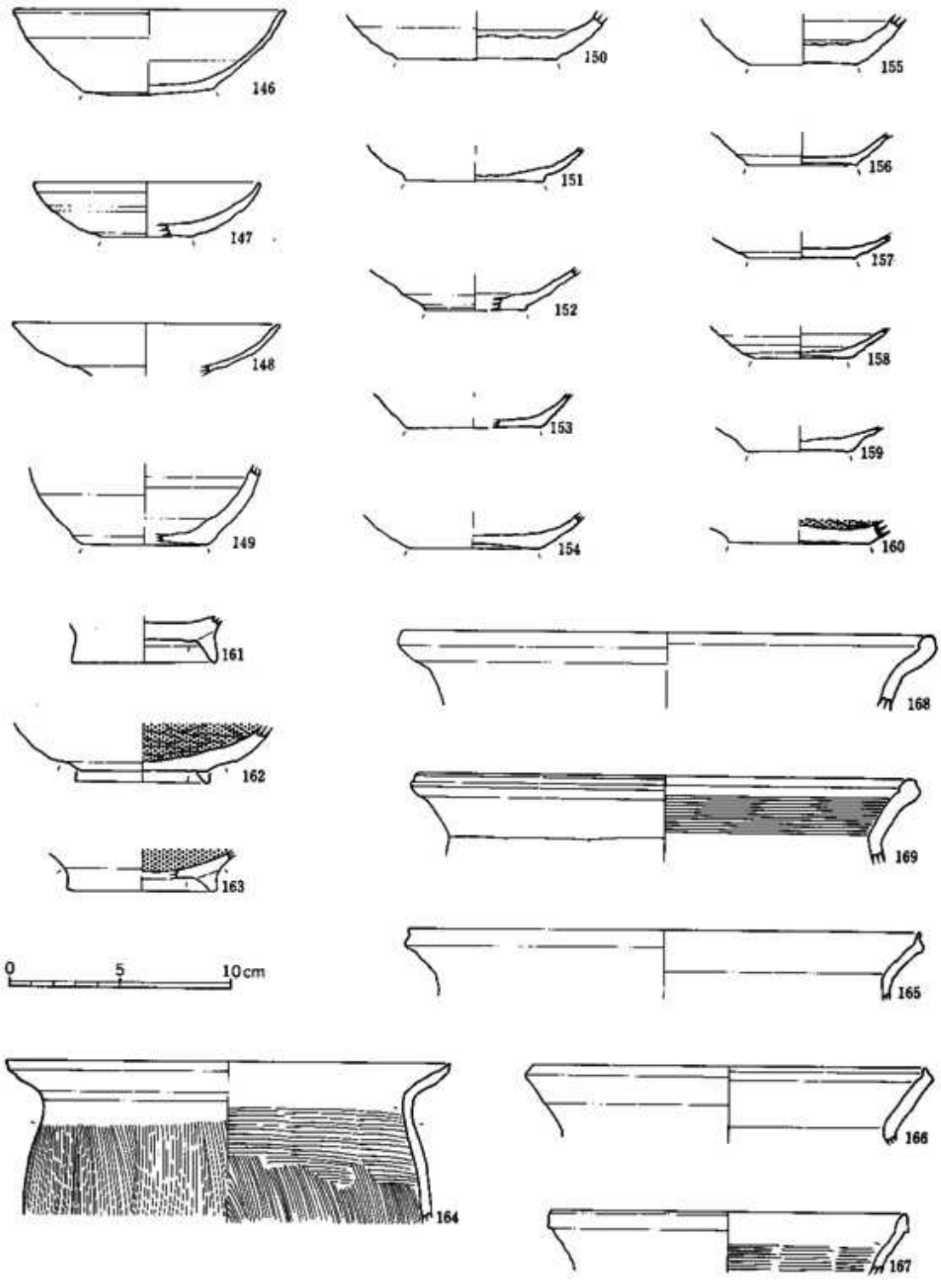
縮尺1/3

図面4　遺物実測図　柴野遺跡　石堤保育園地区



弥生土器・古式土師器

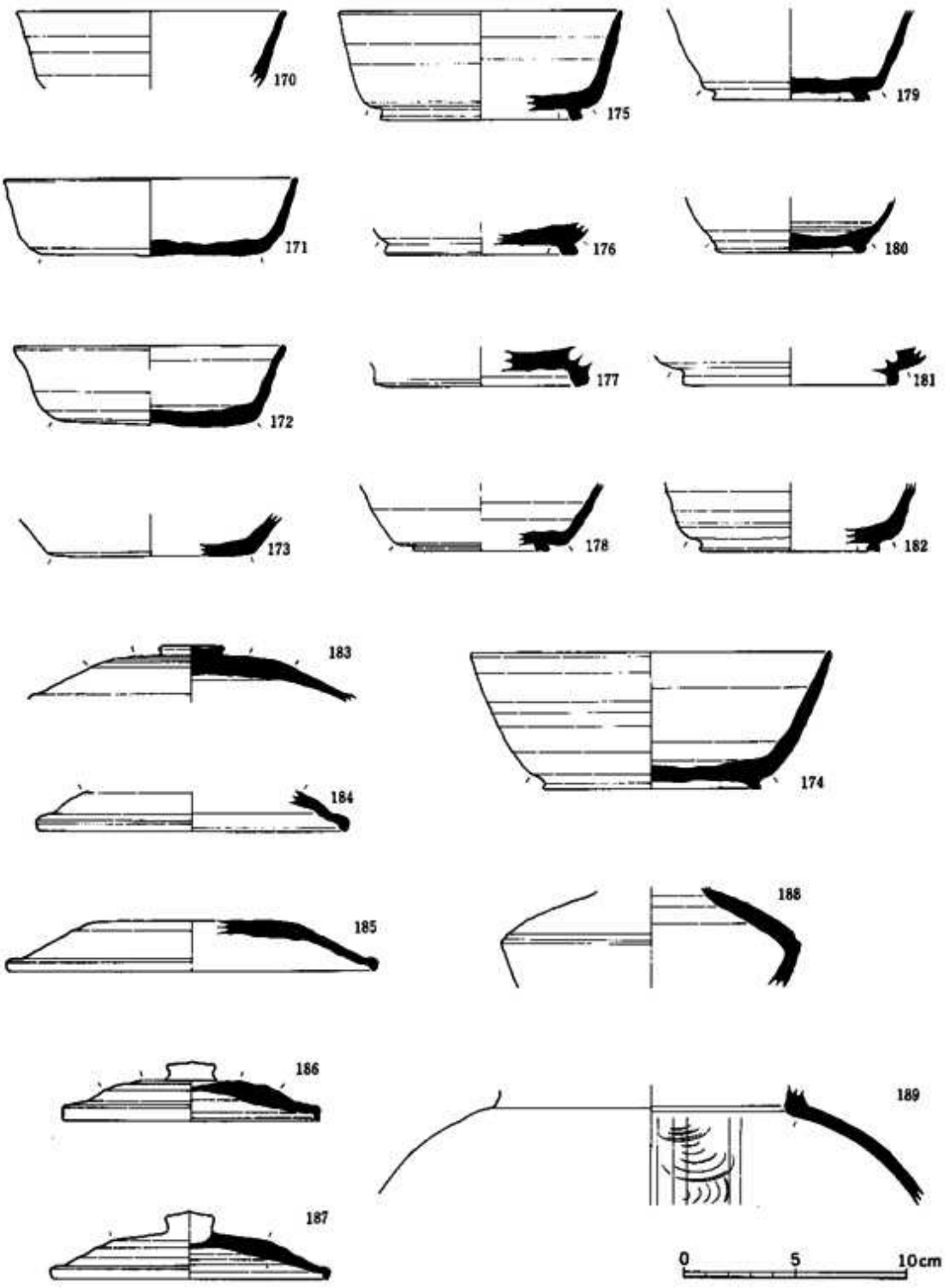
縮尺1/3



奈良～平安時代の土師器

縮尺1/3

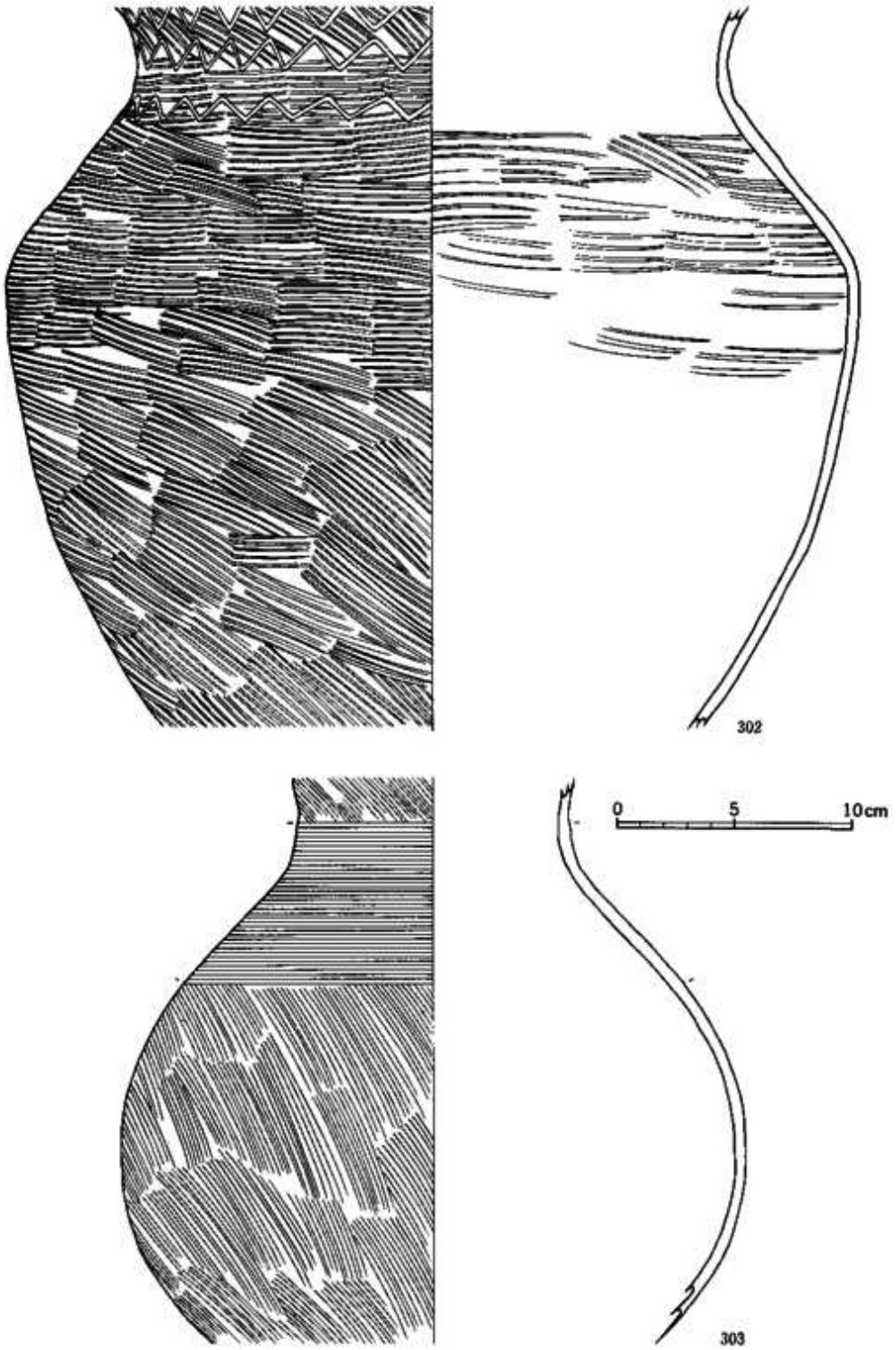
図面6　遺物実測図　柴野遺跡　石堤保育園地区



奈良～平安時代の須恵器

縮尺1/3

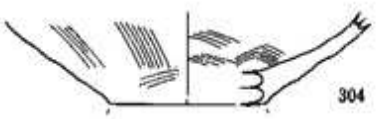
図面7　遺物実測図　石塚遺跡　森田地区

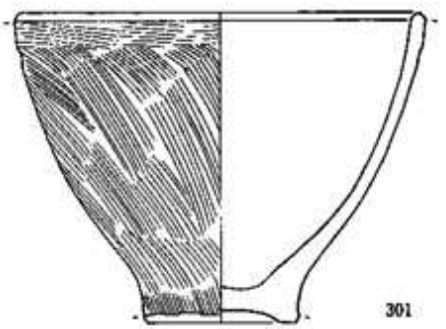


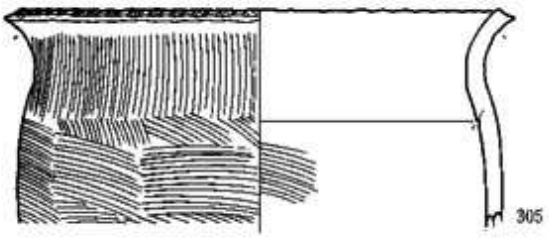
弥生土器

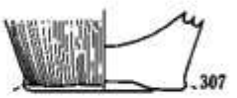
縮尺1/3

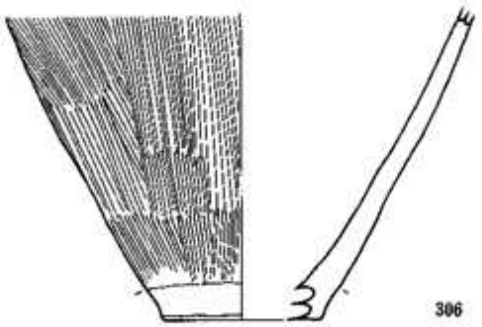
図面8　遺物実測図　石塚遺跡　森田地区

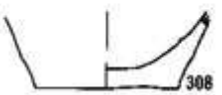


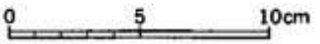












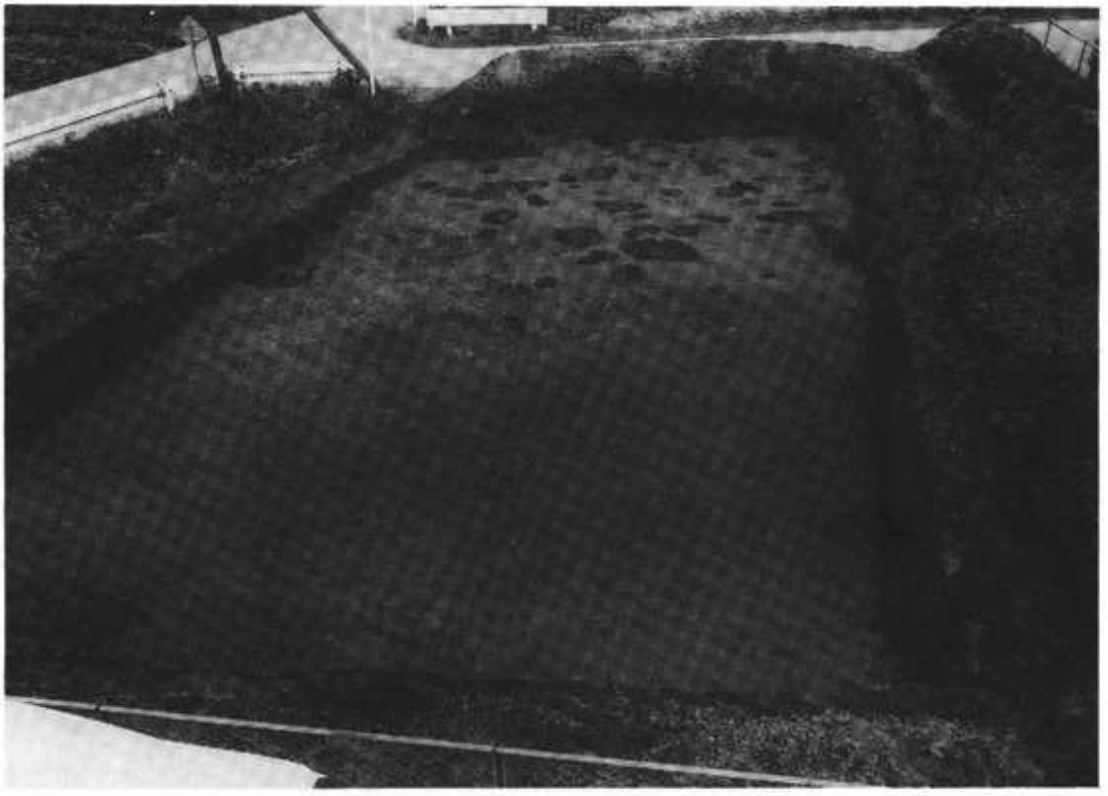
弥生土器

縮尺1/3

図　　版

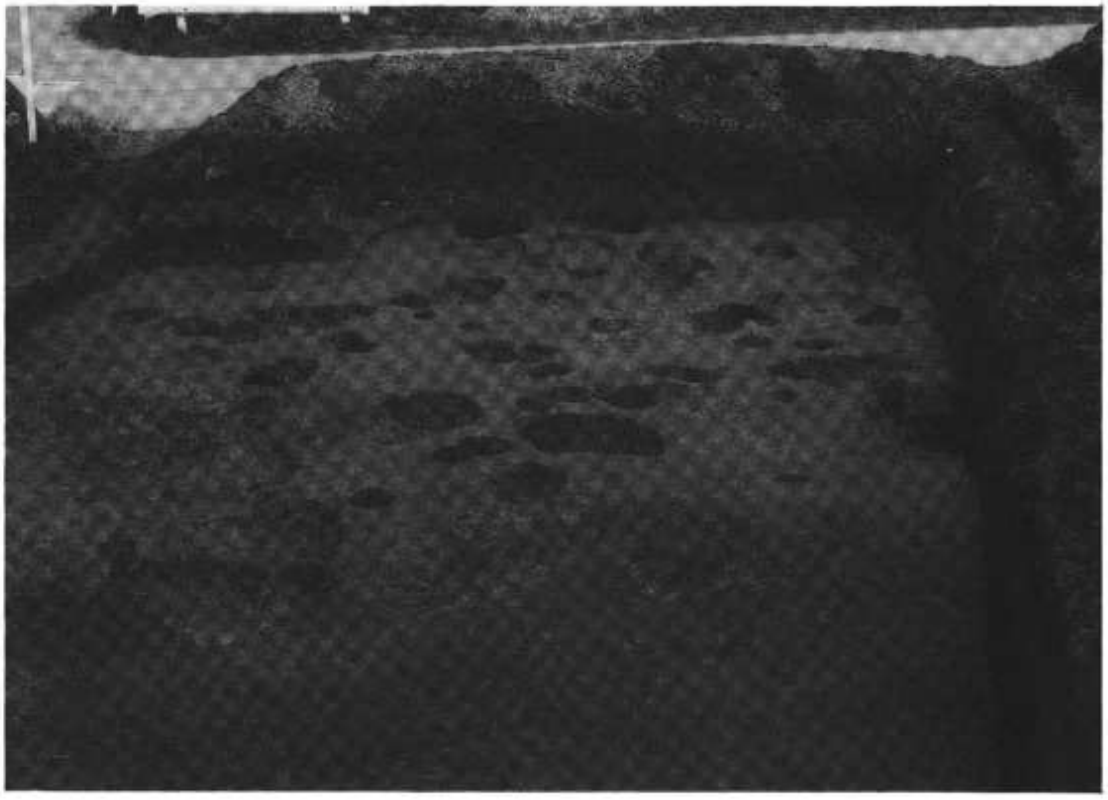
図版1　遺構　柴野遺跡　石堤保育園地区

1．調査地区全景（東）

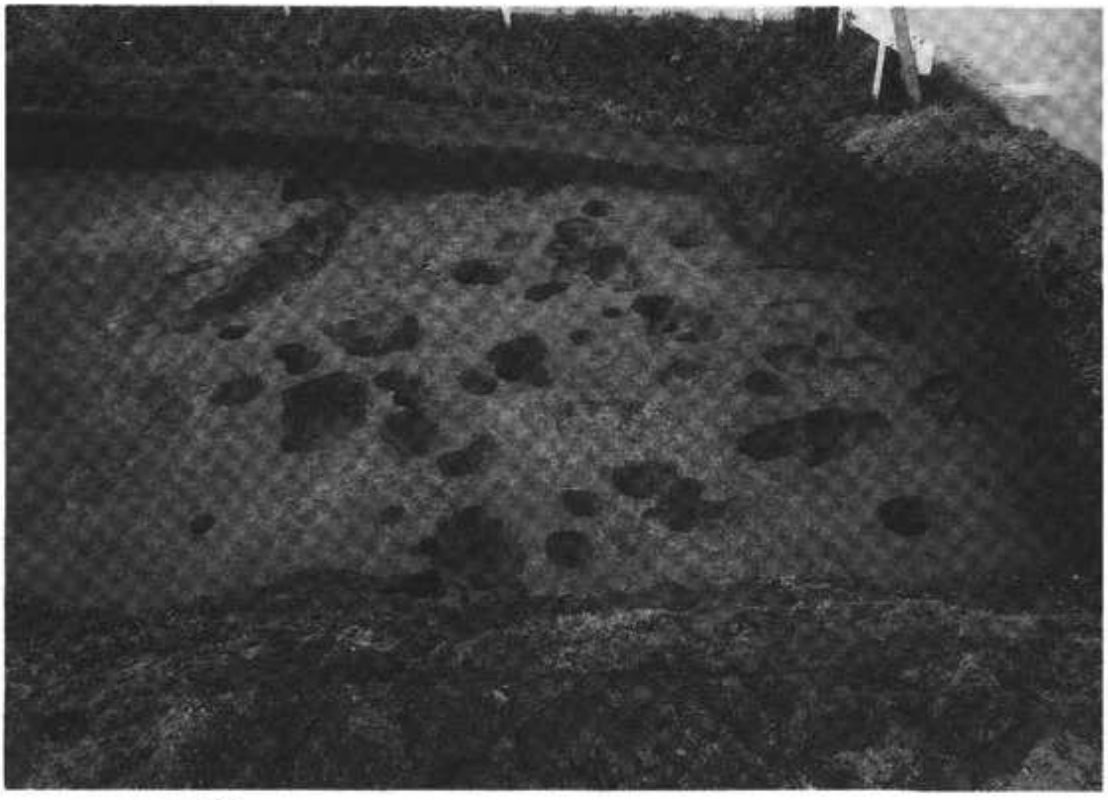


2．調査地区全景（西）

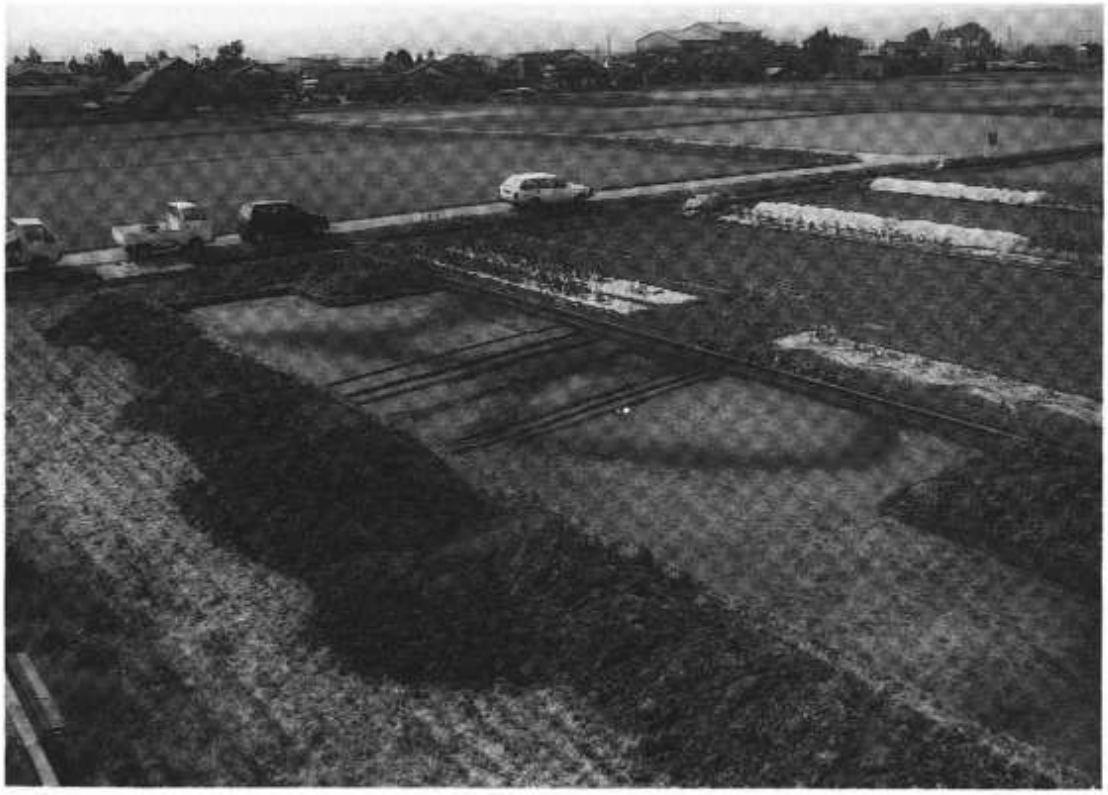
図版2　遺構　柴野遺跡　石堤保育園地区



1．柱穴群全景（西）



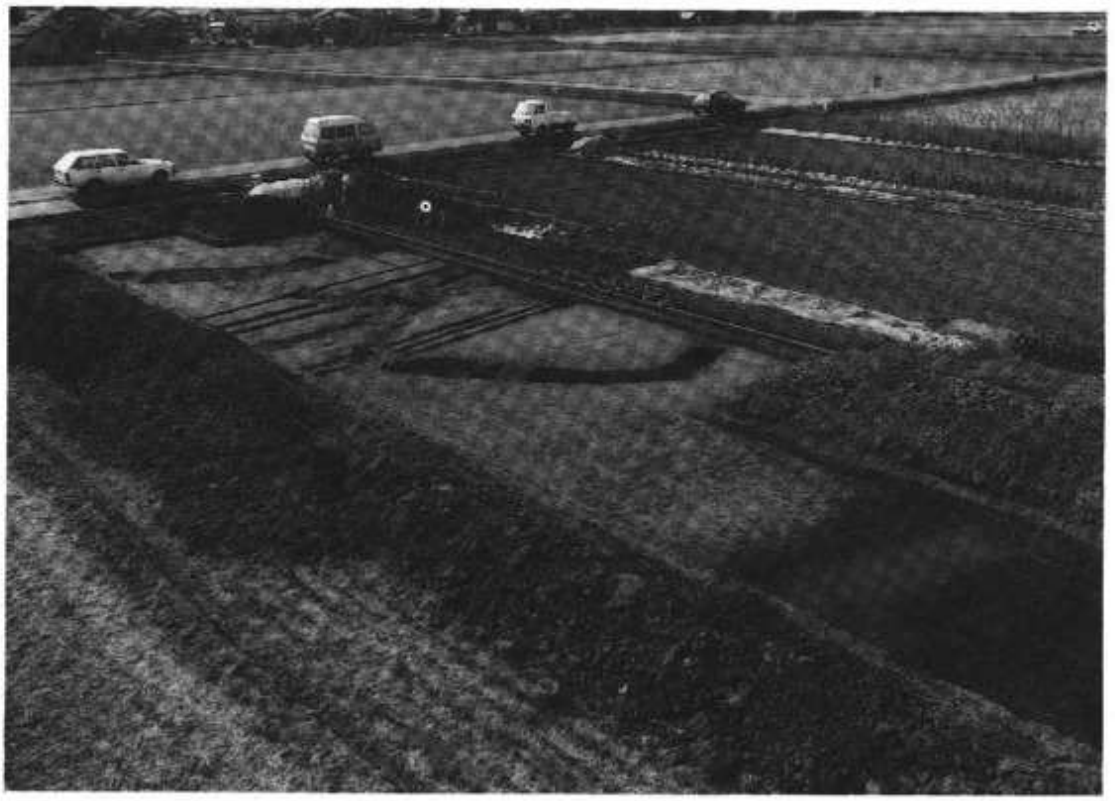
1．柱穴群全景（南）



1．確認状態全景（南東）

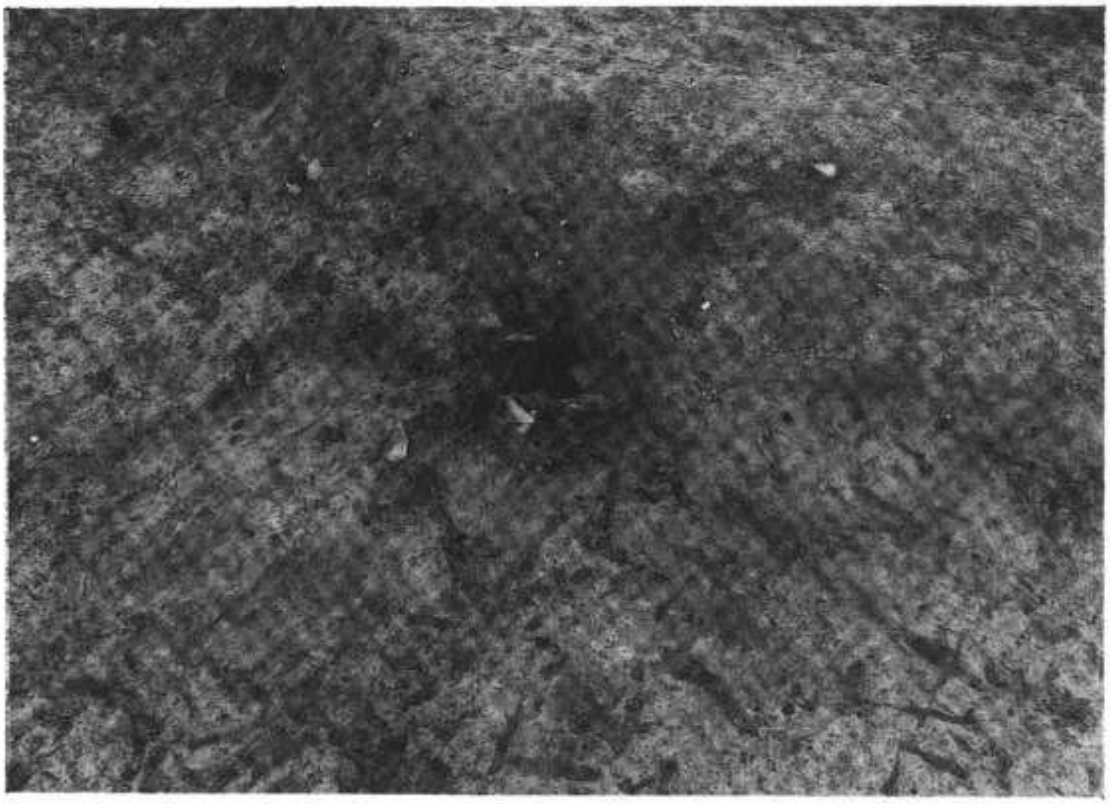
2．確認状態全景（南西）

図版4　遺構　石塚遺跡　森田地区

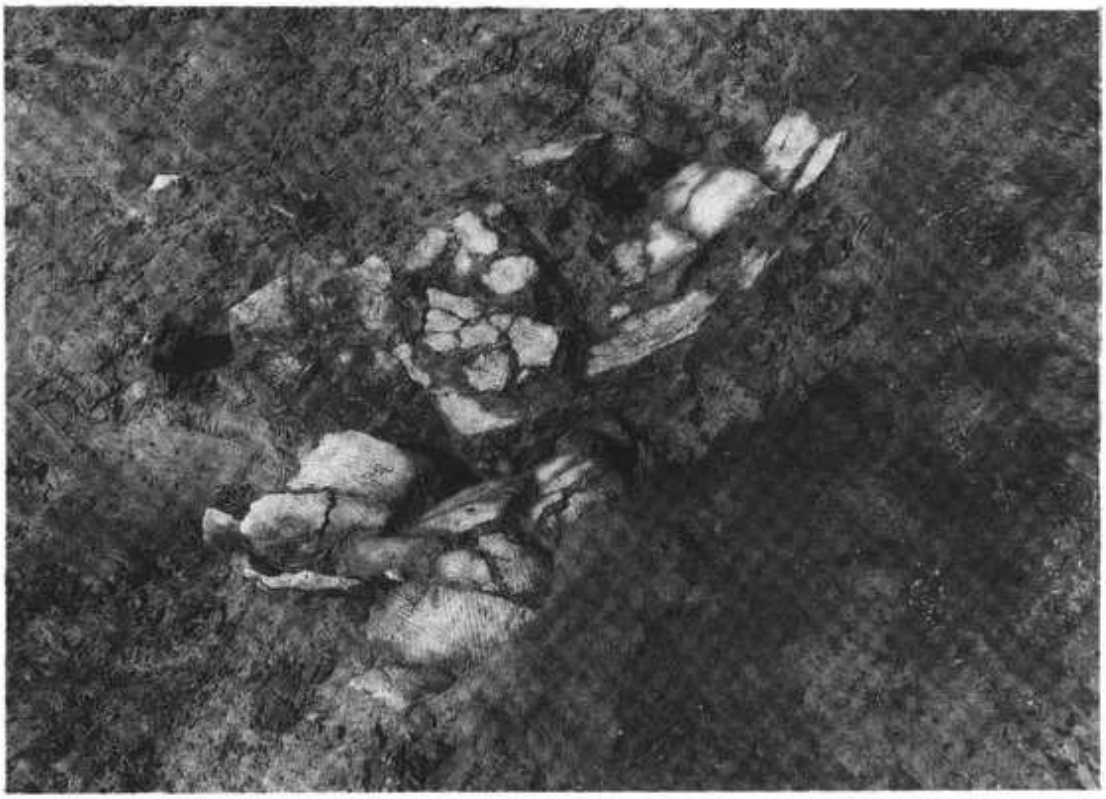


1．掘り上げ状態全景（南東）

2．掘り上げ状態全景（南西）

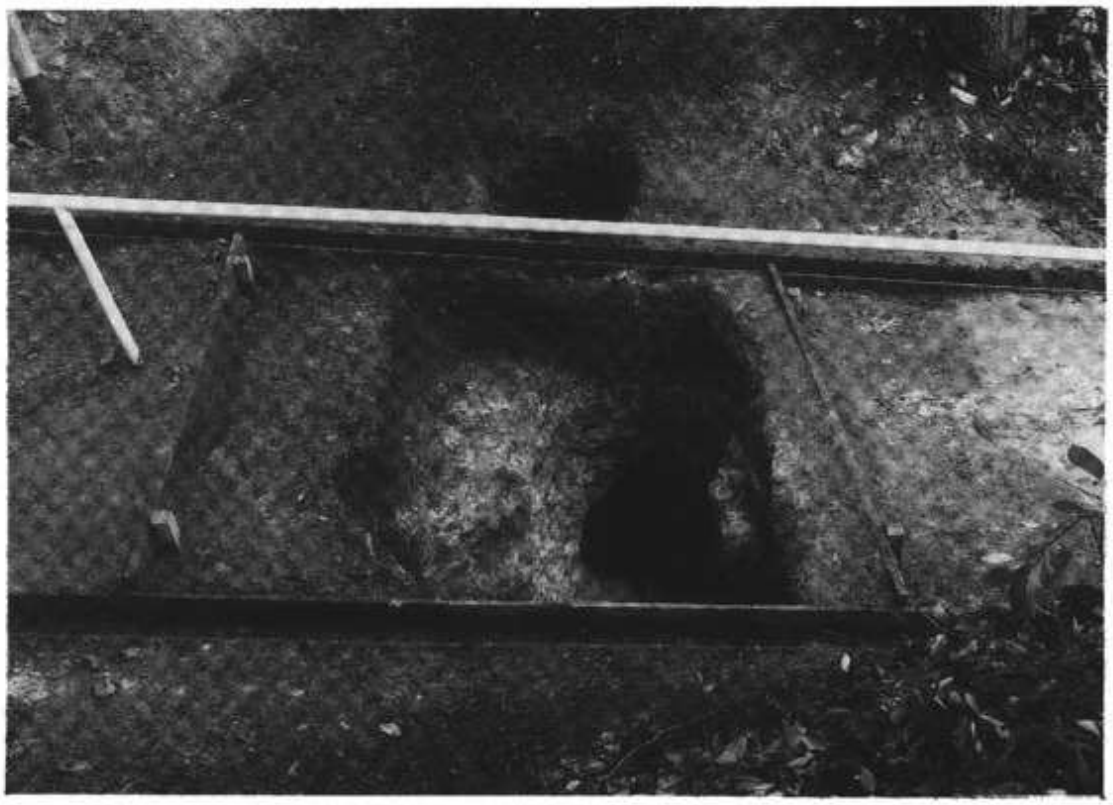


1．弥生土器出土状態（北西）



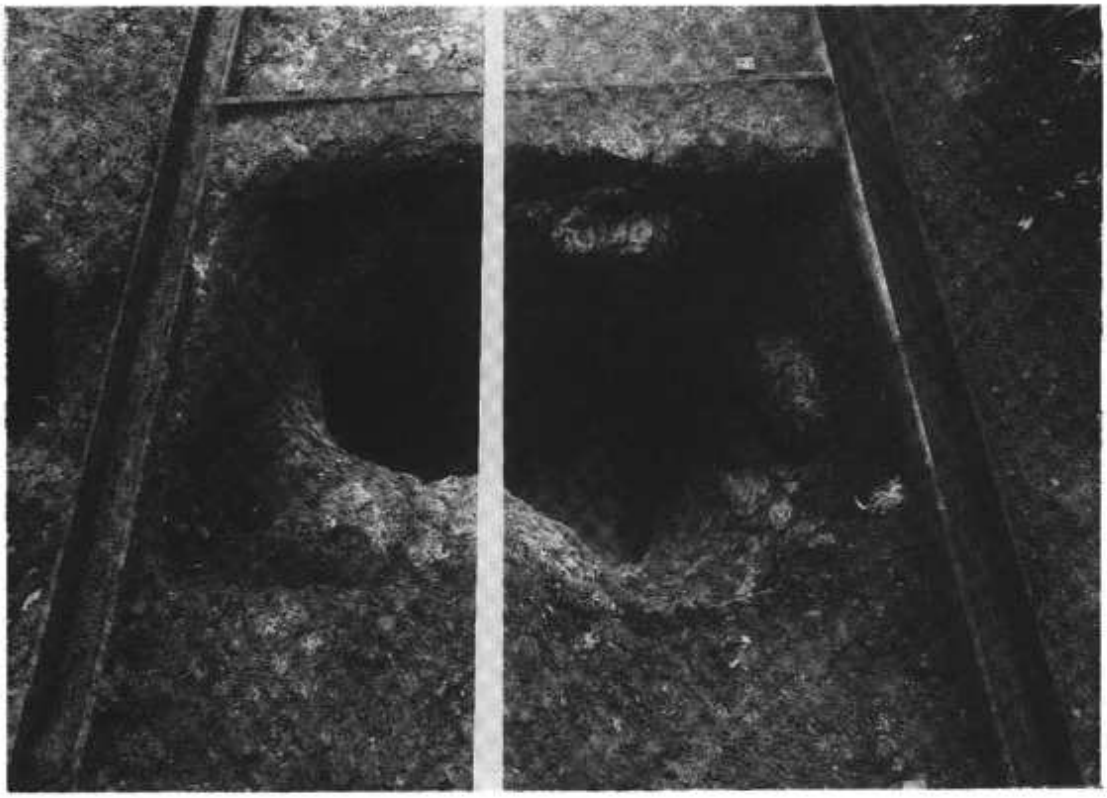
2．弥生土器出土状態（南西）

図版6　遺構　山園町遺跡　院内社参道地区

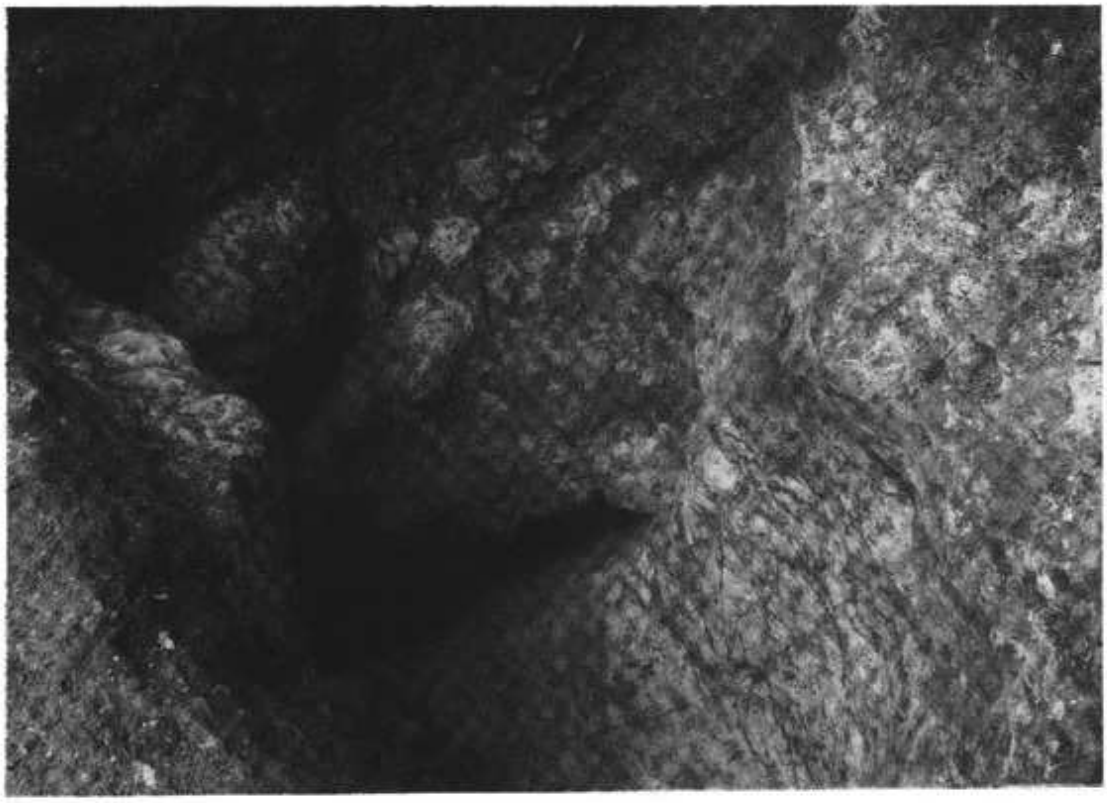


1．調査地区全景（西）

2．調査地区全景（南東）



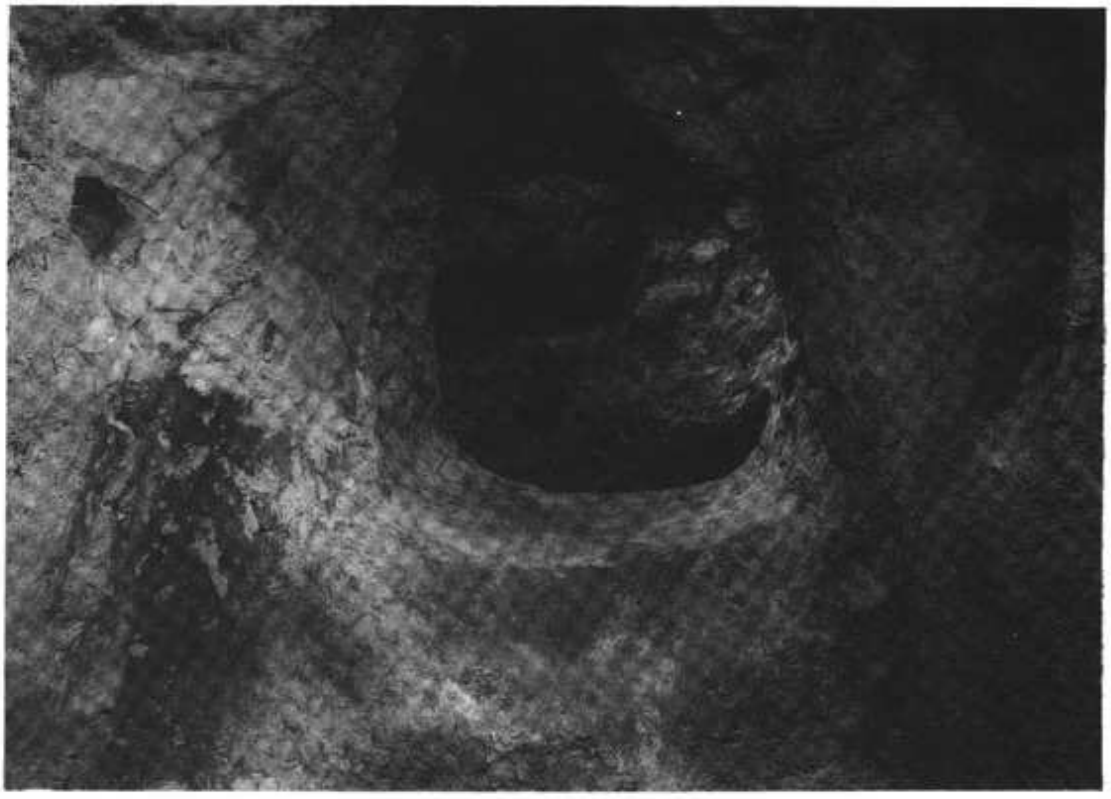
1．入口部全景（北）



2．西側茨門部近景（東）

図版8　遺構　山園町遺跡　院内社参道地区

1．東側羨門部近景（西）



2．東側羨門部近景（東）

1．東側玄室部近景（西）

2．東側玄室部近景（西）

106

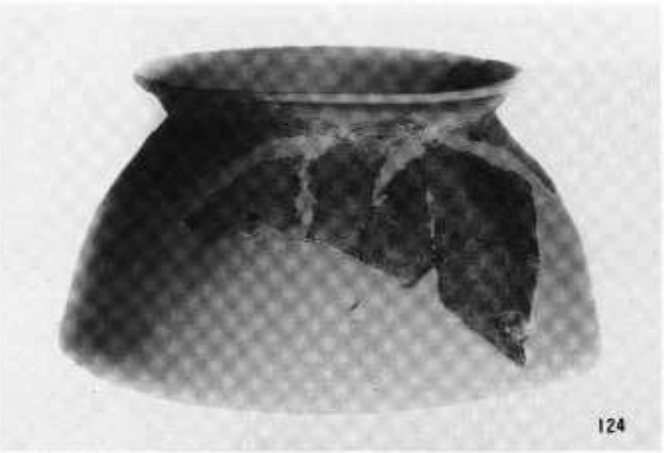
120

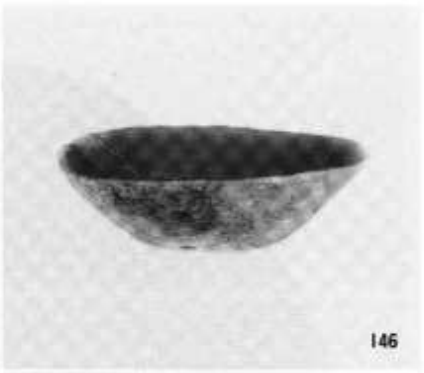
137

121

114

土器類


124


146

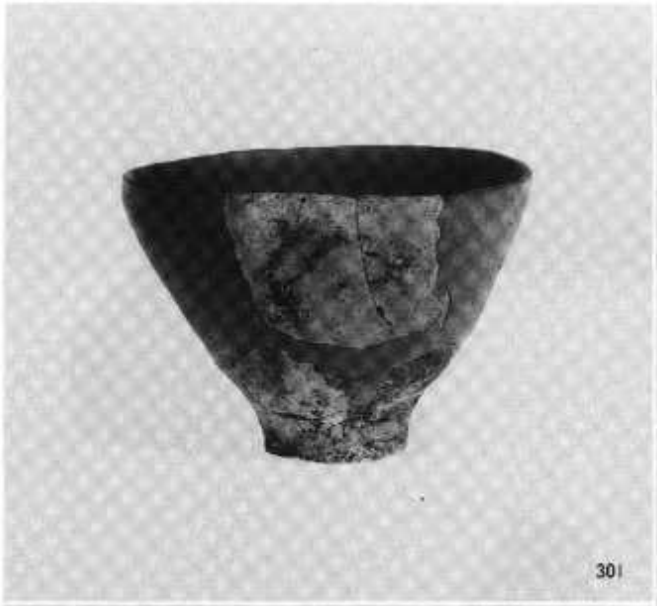
174

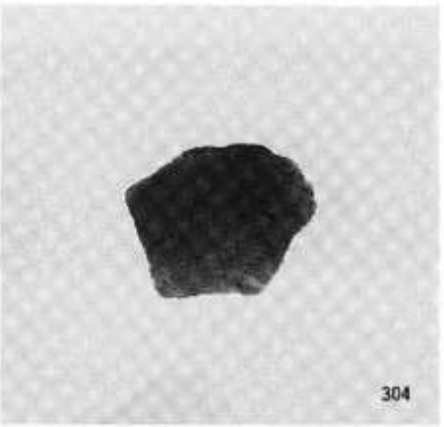
172

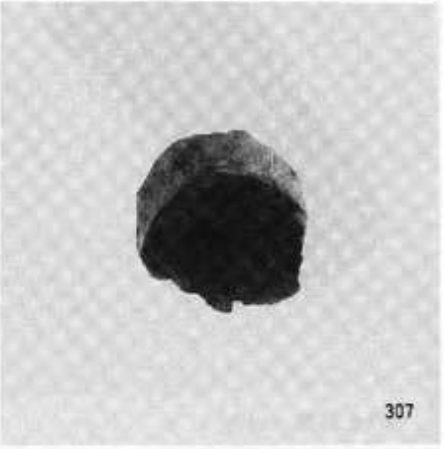
130

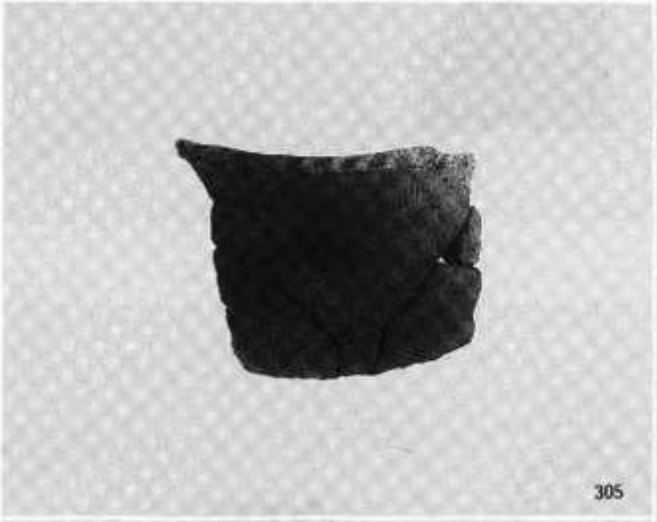
土器類

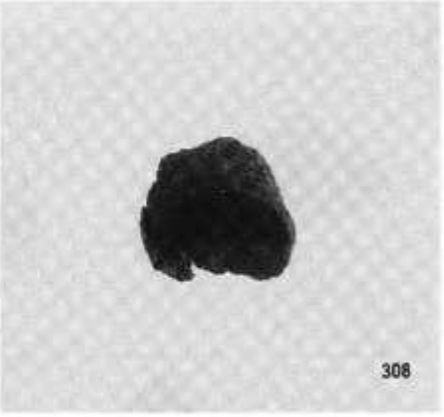
弥生土器

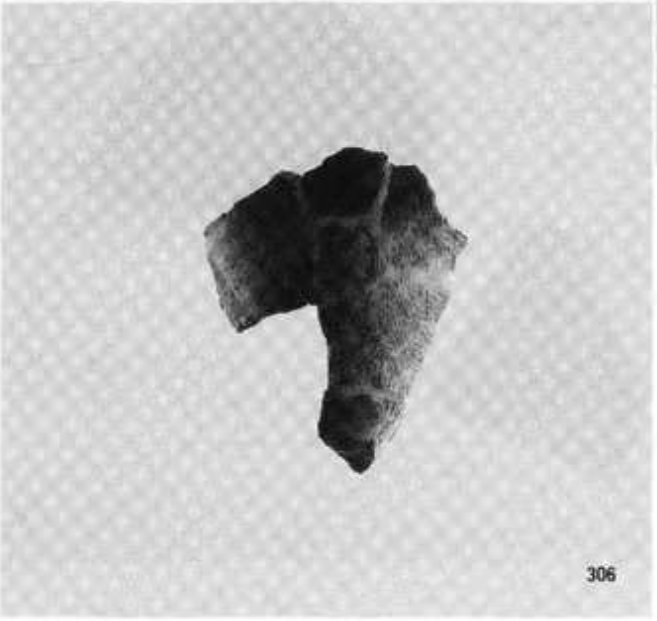

301


304

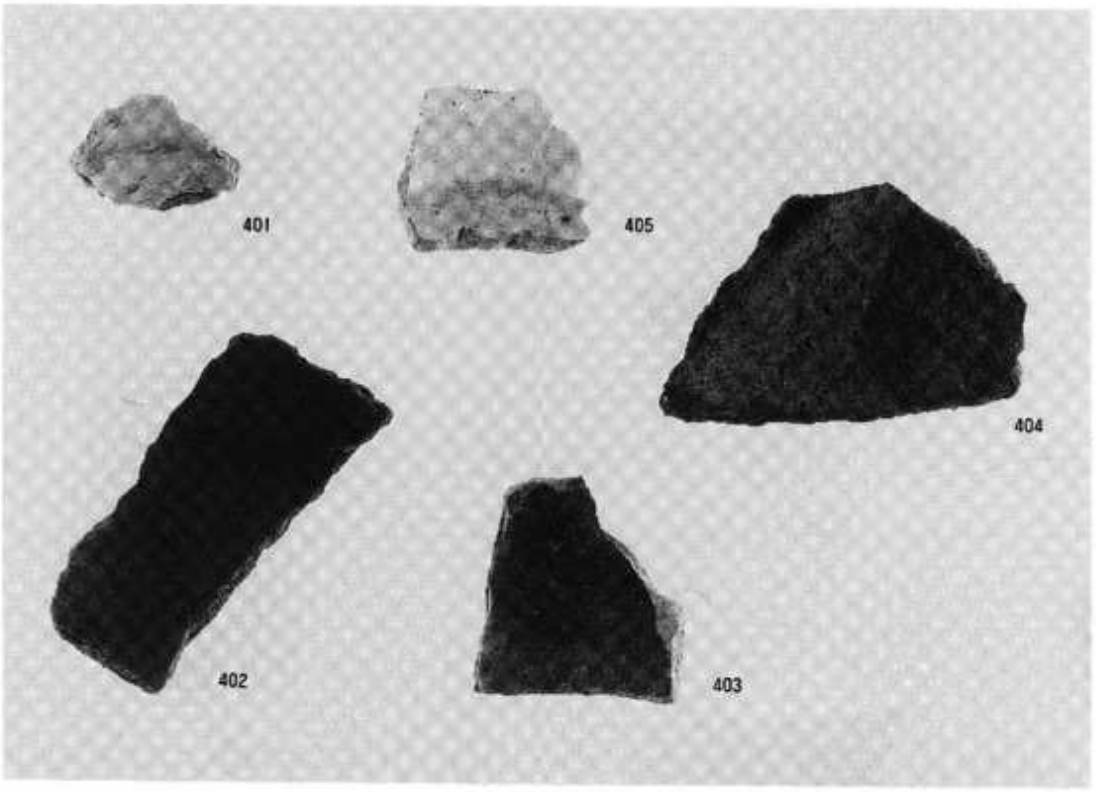

307


305

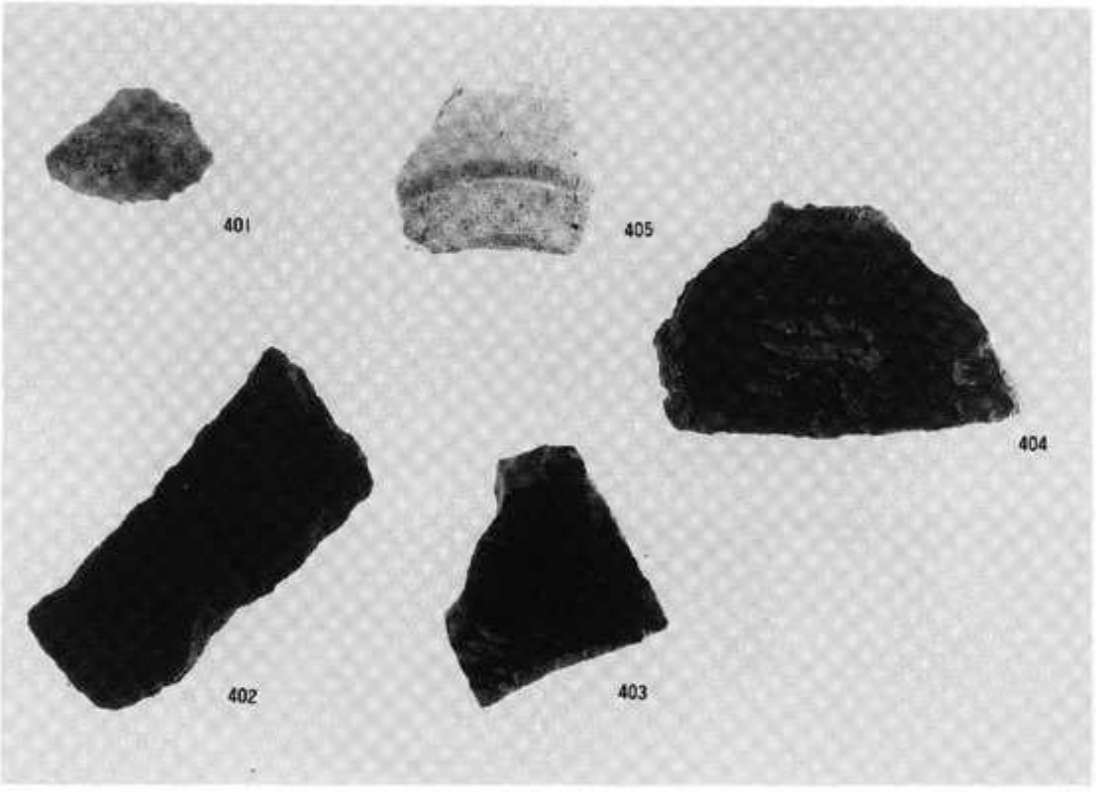

308


306

弥生土器



中世土器類（内面）



中世土器類（外面）

高岡市埋蔵文化財調査概報第22冊

市内遺跡調査概報Ⅲ

発行者　高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7－50

1993年3月31日

印刷所　小間印刷株式会社

富山県高岡市利屋町3